

勝 諺 藏 著 作

脚演
本劇
赤城義臣傳

至自
大 大
詰 序

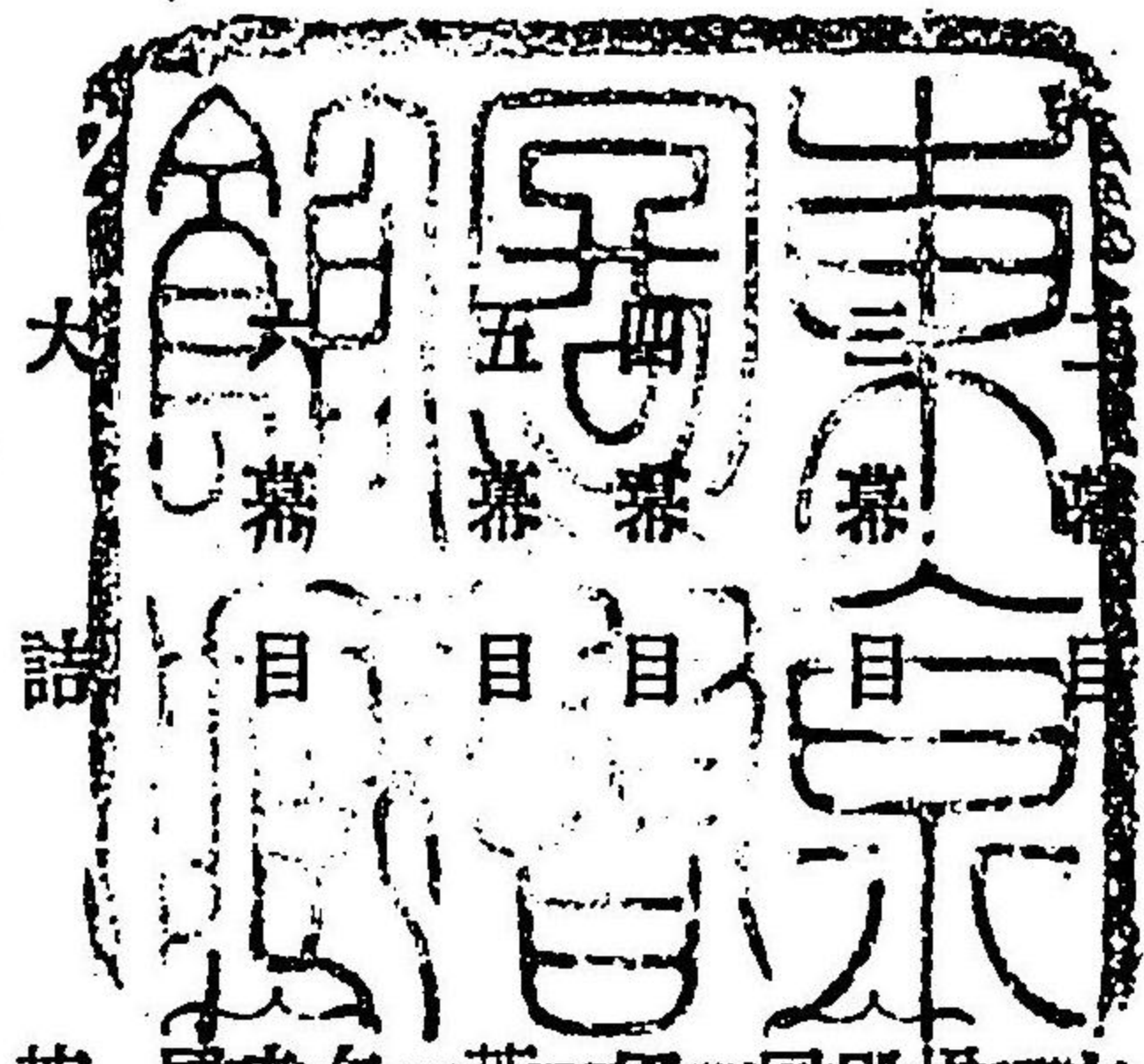
特51

662

脚演本劇赤城義臣傳

大序場

同淺野家表門の場



大詰

菅野三平切腹の場

第一幕

目

吉良上野介屋敷の場

第二幕

目

上寺宿坊の場

第三幕

目

中刃傷の場

第四幕

目

白書院の場

第五幕

目

同殿増

第六幕

目

同殿増

第七幕

目

同殿増

第八幕

目

同殿増

第九幕

目

同殿増



脚演本赤城義臣傳

大序 〔淺野家表門の場〕
同大廣間の場

役名	名
一龜井能登守	一灰谷藤兵衛
一萱野和助	一仁平郷左衛門
一下男作藏	一川田八兵衛
一磯貝十郎左衛門	一腰元 吳竹
一岡野金右衛門	一同 松ヶ枝
一娘 於民	一同 梅崎
一安井彦右衛門	一同 花の香
一藤井又左衛門	一家來 二人
一奥女中淺田	一仲間 二人
一清水團右衛門	一侍 一人
一上島彌助	

造物平舞臺真中丸の内に鷹の羽のぶつ違いの紋付し朱塗の門是に注連飾りを仕たる門松を
 建左右破風家根付の門番所の窓是に續き上下共なまこ扉都て淺野家上屋敷表門の模様空よ
 り梅の釣枝を下るし上島彌助灰谷藤兵衛仁平郷左衛門川田八藏着附麻上下の拵らへにて羽
 子板を持ち吳竹松ヶ枝梅崎花の香腰元の形りにて是も羽子板を持ち双方立掛り追ひ羽根を
 して居る此見得輪囷通り神樂にて幕明く尤幕外へ空より第一月と言ふ札を下るす事 吳竹
 「ト上島様 彌助チツト來たり」ト羽根を受けやうとして落とす 立三人「ソレ又上島氏が落
 されたぞ 松ヶ枝「サア皆さんかいを叩いて遣らしやんせ 女三人「アイ叩いて上升う 彌「ア
 待たり今のは本の怪我じやく」 藤兵衛「是はしたり上島氏卑怯千萬畢竟遣り羽子の戲
 じれなれはこる能けれ 彌左衛門「是が戰場なれば敵の太刀先を受け損して怪我では滅多に相
 濟しやない 八藏「命替りのかいどの成敗サア叩いたり」 女皆「合点じやわいなア」ト彌助
 の尻を羽子板で叩く「彌「アイタ」皆覺へ居れ今度は落えた者は顔へ墨を塗るが承知か
 女四人「コリヤ面白からうわいなア 彌「サア墨塗りの始り」ト又羽根を突く向ふより清
 水團右衛門麻上下大小にて家來一人付添出て來り」家來「旦那様お足元がおあふさうムリ升
 る 團右衛門「エ、たこけを尽せ御本家にて年始のお目出度酒を頂戴致せば連今日は主人の申
 付け何ても此酒の勢ひにて内匠頭を一本参らさねば相成らぬサ、参れ」ト舞臺へ來る此内

皆々羽根を突き居て梅ヶ枝羽子板にて團右衛門の願を突上る願の番ひ取れたる思入にて」
 團「ハア、ひたいく」家來「モン旦那様何う被成れ升した」團「ハア、取つたくはどが取つた家來、何願が取れたのでムリ升か」吳「梅、モン皆さん」四人「ひよんな事を仕たわいなア、藤、是はく、何れの御家來かは存じ升せぬが思はず、庵相眞平御免下さり升せ」團「ひよそうと計りてふもうと思ふかばれへ直れく」ト「鑿音をさせる」團「御立腹の段は御尤ではムリ升れと申さは時の御災難」團「シテ御家來御主人は何れの御家中でムるか何卒御姓名をお聞かせ下され」四人「又お詫びの仕様もムれば」家來「手前主人事は高家の出頭にてお傍用をお勤め被成る、清水團右衛門様とおつしやるお方」ハ「スリヤ吉良家の御家臣でムつたか存せぬ事どていかひ失敬」四人「御免下されく」團「ばれへ直れく」家來「モンく旦那様肝心の御口上を述るお役目が濟み升まいマアお腹立より願の療治が第一肝心」ト「手拭を出し團右衛門の願へ掛けてく」家來「サア皆力一ばいに引て下さり升せ」四人「チット心得た」ト「双方より締める是にて願の番ひ直りしこなし」家來「モン何うでムリ升」團「何うか元々に納つた様じや」ト「手拭を取りお丸行燈向ふの古桃の木に古ぼろが下つた法性」團「○奇妙く願が元へ納つたら弓矢八幡堪忍ならぬ夫へ直れ○という所なれども今の庵相は女なれば苦しうないく」吳「花、そんなら御了簡遊ばして」四人「下さり升るか」團「サア其了簡も主人吉良

よりの則お使其口上を申述る願をはづしたと表立ては猶濟まいろこが下世話の讀と聞か御内濟は承知でムらうの」立四人「其義は此方の庵相でムれば」團「夫さへ御承知なれば使者の案内お取次下されい」藤「スリヤお使者とあるはアノ當家へ」團「如何にも主人上野介よりお心得の爲長矩殿へ申入度義がムつて」團「左様ムらは此段を家老中へ御披露致す其間暫時是に」四人「お扣へ下され」團「如何にも承知仕つた」女四人「左様なれば私共も」團「ア、コレく其御披露に際取つて内濟の義を御失念ない様に」○「アハ、家來、旦那様私は何う致し升せう」團「オ、其方は何れも同道してお玄關へ参り披露が濟まば知らして参れ」家來「畏り升まて」團「然らば清水」四人「團右衛門様」女四人「サアムんせいなア」ト「家來付添皆々門の内へ這入る」團「犬もあるけと棒に當ると何れの道にも折の下へ山吹色を敷くは必定所で跡が主人の言付け是も差詰め袖の下今年ハ初春早々から福の神が舞込んだと見へるわへ」ト「向ふよりお民振り袖娘旅形りにて菅笠を持ち杖を突き跡より作藏下男の拵らへ旅形りにて付添ひ出て」作藏「何とお民様お江戸の繁華は咄しよりは又格別な者ではムリ升せぬ」吳「さいなア私の様お田舎者よはあんまりの賑としさで道さへどんと分らぬが」シテ「三平様のお勤め被成るお屋敷はモウ爰らでムんぞかへ」作「サアわしも始めてゆへ國を出る時旦那様に書て貰ふた所書を此煙草入の段口へ」ト「腰を探り」作「南無三今の茶店へ煙草入を忘れて來

たを見へるわい 民「ろりやひよんな事しやしやんしたなア 作「一寸尋ねて参り升ればおな
 たは此邊に待て居て下さり升せ 民「早う往て来て下さんせ 作「手間取る事でもムり升せぬ
 ○然し道が知れればよいが」ト引返して這入るお民は舞臺へ來り團右衛門を見て」 民「卒爾
 乍ら物をお尋ね申度うムり升る 民「イヨウ見れば旅の女じやがハテ何を尋ねるのじや 民「
 ハイ淺野内匠頭様のお屋敷は何れでムり升るかお教へ被成れて下さり升せ 民「何じや内匠
 頭殿の屋敷○ハア、扱は遠國者じやあ 民「ハイ攝州より遙々と尋ねて参つた者でムり升 民「
 道理こそ知らぬも尤然し供をも連す一人旅とは何うやらうさんな 民「エ、 民「イヤサ遊参
 う何かは知らぬ共此江戸と申所は恐しい悪い土地夫に女の一人歩行は無分別と申さうか今
 にもかどこかされぬ様に用心をしたがよいぞ 民「夫はマア其様な恐しい所でムり升るか 民「
 イヤモウ恐ろしい段か其恐しい御府内にて身共の様な慈悲深い侍に逢ふたは其方の仕合と
 申者内匠頭の屋敷も教へて取らさうが定めて禮があらうなア 民「サア其お禮と申升ても連
 れの者が参り升せねば 民「何じや連れが有るのかさう聞ては早いがよい先禮物には」ト手
 を捕へるを悔りして飛退さ」 民「アレ悪い事を被成れ升るかいなア 民「何悪い事を致さう
 ぞ幸ひあたり人目もなし 民「アレ誰ぞ来て下さんせいなア」ト向ふより菅野和助羽織袴
 大小にて作藏付添ひ出て」 作藏「若旦那様よい所でお目に掛り升した 和助「先其方も息災に

て重疊委細は屋敷で承はらんサ、來やれ」ト舞臺へ來る此内團右衛門お民争ひ居て取違へ
 て和助を捕らへる」 和「お侍コリヤ其を何と成さる、 民「ヤ旅の女と思ひの外 民「あなた
 は菅野和助様よう來て下さり升たかア 作「モンお民様何う被成れたのでムり升る 民「サア
 あのお武家様が私を捕らへて 民「ア、コレ知らぬ、○エ、あの可助めまだ取次の沙汰は
 ないかコリヤ爰にはおられぬわい」ト門の内へ這入る」 和「いづ方より参りし者かハテうる
 たへ侍ではある○夫にしても作藏より承ればお民殿にも御親父と同道にて下られしは御
 年頭のお禮旁々不知案内の所をば父上水魚の交友とて御深切なるお心添へ千万忝う存じ升
 る 民「何のお禮に及び升せう爺様は年毎にお下り被成る年頭のお禮私も今度同道致し升た
 は幼な馴染のあなた様や又お兄御様にも久しくお目にもかいらぬ故一目お顔が見たいばつ
 かり○シテ三平様にはお變りもムり升せぬかいおア 和「去れば病身の兄なれ共此兩三年は
 持病も起らす息災で勤め居り升る 民「夫はマアお嬉しい事でムり升るわいなア 作「其若旦那
 那方の御息災に引替へてお袋様の今度の御病氣 和「何母人にて御病氣とな 作「夫故態を下
 り升たは旦那のお使ひ○委敷い事はお手紙にて是御らうじて下さり升せ」ト割掛けの荷物よ
 り手紙を出して渡す和助開き見て」 和「ム、スリヤ母人には翌をも知れぬ大病故是非兄弟
 共暇を願ひ死に目に逢へよと知らせのお使ひ○コリヤ困つた事じやあア 民「ろんなら三平様

はアノお屋敷にか出被成れ升かいなア 和如何にも兄は屋敷に居れ共殿様には此度上使御
 下向に付饗應司の役を命せられ上は元より一家中滞りなくお役をお勤め遊ばす様と殿様始
 め父母の御息災をも祈りし甲斐なく御大病と聞からは片時も早く駆付て御介抱申たいけれ
 ば斯る折柄お暇を願ふも如何なものの先づ兄上とも相談の上計らひ申さん 作左様なれば私
 も御同道致し升せう 民「私も早う三平様のお顔が見たうムんすわいなア 和誠に寺子傍輩
 とて左程迄兄者人をばお慕ひ被成るも何うやら心に 民「エ、作イヤサ心の急くも火急の
 お使ひ 和「然らば作藏 作「若旦那様 和「ドレ案内を 作「へい「ト作藏は割かけを肩へかけ
 る和助は手紙を袂へ入れる是を一時の木の頭」和致すであらう「ト此仕組鞠哥通り神樂に
 て返し

造物平舞臺襖通り丸の内に鷹の羽の紋散らしの金襖橋掛り杉戸の見切り大欄間を下ろし都
 て淺野家對客の間の体爰に安井彦右衛門藤井又左衛門着附繼上下家老の拵らへにて住居眞
 中に團右衛門掛物の箱を前に置住居後ろに以前の諸士四人扣へ居る此見得調らへ合方にて
 道具納る 彦右衛門「スリヤそこ元には吉良家の御家來清水團右衛門とな拙者事は當家の江戸
 家老を相勤る安井彦右衛門 又左衛門「藤井又左衛門と申者以後御別懇に 兩人「願はえう存じ
 升る 團是は御丁寧ある御挨拶然し此度のお役向に附ては手前は兎もあれ主人上野介とは

御別懇に被成らず第一お役が勤まらぬと申もの何と左様なものではムらぬか 又如何に
 も貴殿の仰せの通り去年極月主人又は正使饗應司の役を命せられ候へ共 彦中々主人如き
 が勤むへき役儀にあらず依て先達て願上候通り吉良公には萬事此道に馴れ給へは指南を受
 けよと御老中方のお指圖何卒お引廻しの程を 兩人「偏へに願上する 團イヤ今日主人某を
 差越れしは先達てより内匠頭殿度々お越し被成るれ共饗應司の役目に付ては強ち主人の差
 圖を受けねはならぬと申譯でもなく萬事自分の巧者を以てお勤めなされよとの主人の口上
 ○サ斯様申も此一軸お手前方にも御存じない事はムるまい「ト箱より照月と書たる軸を出
 す」又「何其軸を 兩人「存じて居るとは 團去れはさ去年九月木下肥後守殿茶席に於て山田
 宗偏が求めたる此軸をバ主人へ目利を乞はれし所内匠頭殿其座にあつて一休が墨跡ならす
 と言張り満座の中にて耻辱を與へし程の物知りが指南を受けさうな筈があらうか此義は平
 にお斷り申せと主人申越されてムるは 彦是は「思ひも寄らぬお詞其節主人何事を申せ
 しかは存せぬぞも 又此度の大役に付升ては是非吉良公の 團是サ其指圖を受けたい者が
 と何故あつて正真正銘の墨跡を偽筆なりと申張り主人へ耻辱を與へられしぞ 兩人「其義は
 一向 團御存じないといはるゝか「ト向ふにて」十郎左衛門「アイヤ暫らく其仔細は磯貝十郎
 左衛門 金右衛門「岡野金右衛門夫へ參つて 兩人「辨解の仕らん 團ヤ何と「ト向ふより磯貝

十郎左衛門岡野金右衛門着附麻上下にて出て花道に住居」
 門 誰のと思へば磯貝十郎左衛門 貴殿は岡野 四人「金右衛門殿 下れ」
 二人「下り升せうぞ 十」アイヤお詞には
 ムり升れど只今お次に承れば主人内匠頭吉良公へ對し正眞の墨跡を偽筆なりと申なし上
 野介様へ耻辱を與へし由 金「此義はちとお詞相違致せば主人よ代つて申述へたく失禮をも
 願み升せず 兩人推參仕つてムり升る 圓「面白い然らば身共も主人に代り今問ふ事を答へ
 られるか 十」如何にも其節お供に參り 金「主人の詞を承知致せば 圓「然らば問ふぞよ 兩人
 お答へ申さん 八兵衛「御所是へ 四人「お進み被成れ 兩人「御家老御免被下升せう」ト舞
 臺へ來り住う團右衛門軸を開らさ」 圓「先達て木下公の茶席に於て見極めし一休和尚が眞
 筆の此墨跡主人上野介には茶事を好み書のみに限らず器物の目利は大の上手夫に何ぞや内
 匠頭殿まだ若輩の分として主人を侮どり偽書なりと何を見留て批判されしぞ 十「去れい
 でムる主人事は都紫野大徳寺は御縁あつて一休の書れし筆は毎度拜見致し居る故其照月の
 文字に不審を打しも御尤 圓「なせ此照月の二字が不審成るぞ 金「サ夫は主人の見極し所惣
 して月は照るを以て世の人は是を賞翫なす然れ共詩に作り歌に讀むには月と言へは照るを包
 み照ると言へは月を隠そが常なるよし 十「然るに僅二字の文字を書んとして一休程の者が何
 とて照月と書くべきや斯様を文盲なる事を書捨にする一休ならば古人何を以て是を愛し重

寶と致すへさや 金「吉良公墨跡のお目利は被成るれ共只墨色筆勢のみを御覽遊ばし斯様な
 所に心を付けずお目利ありしを氣の毒と存し助言致せし内匠頭餘も誤りでは 兩人「ムり升
 まい 圓「アハ、主が主なら家來迄無學文盲コレ月といふて照ると書れし故に眞筆ならぬ
 とは物を知らぬ儲を證據水の面に照る月なみと數ふれば今宵ぞ秋の最中なりけり○サ此哥
 は三十六番の哥仙の中に撰まれたる源の順か歌でムるぞ斯る證據もある者を月に照るとは
 なせいはぬ 十「サ夫が則御覺悟違ひ水の面に照る月なみと詠せしは正二三四五六七八の
 月並みを數へたる心にて照るは即上に付て月は下に付けたるよみ歌 金「然るに上下を引付
 け照月なみと覺へられしは失禮ながら吉良公には歌道は一向御不案内と見へ升るわいアハ
 、 圓「ヤア言はして置けば雜言過言今一度言つて見られよ滅多に用捨り致さぬぞ 十「お
 望みさればお相手に成る分なれ共先照月の御返答より承はらん 金「主人の目利を難するに
 は外に儲かな證據がムらう夫承つた上のお相手 圓「サア夫の 十「偽書と申せし内匠頭か誤
 りでムるか 圓「サア夫は 金「正眞といはれたは御主人のお目違ひでムるか 三人「サア」
 〳〵 圓「何を小癪な」ト刀を取つて立かゝる後より」 能登守「アイヤ待うぞ能登守使者へ
 一言申事あり」ト出て來る」 圓「レテ某をお止めありしは 能「年頭の禮として只今當家へ參
 りし所何か争ひ趣意は知らぬぞ私の宿意を以て公用の勳向を存せぬとは近頃其意を得ざる

一言こりや其方の申詞か但上野介殿の言付なるか 四「サア其義は 熊」年々上のお眼鏡を以て改る響應司なれの新役の方々には御指南申が高家の職掌夫に何ぞや只今の振舞は察する所上野殿役義をかせに墨跡の手柄を得んどの心底なるか 四「サア夫は 熊」此段上へ訴へ出やうか 兩人「サア」くく 熊「何うじや」 四「ハアア」何拙者今日参りしは皆某の出来心何分御内分にお濟し下さる様お願ひ申く 熊「左あらは愈々捨置難き陪臣の無禮其座は立さぬ觀念致せ」ト柄に手を掛ける 四「ア、龜井公」く去り逆はお氣の早いア、ユリヤひよんな所へ足を踏み込み抜きも差もならぬとは天道我を見捨て給ふか龜井公武士一人をお助けあらば猫三正に向ふ御功德此通りく 熊「打捨置れぬ所あれ共目出度新玉の年を迎へし當方の座敷を濱すも如何情を以て命は助くる早く立て」 四「イヤモウ仰せなくとも斯様な席に何て長居を致さうか何れも最早お暇申す 熊」ア、待て」 四「まだお世話が焼き足り升せぬか 熊」其方歸らは上野殿へお心得違ひなき様能登守申せしと披露致せよ 四「御念の入たる其お詞言上致すでムらうわい」ト懸物の箱を抱へ向ふへ走り這入る 熊「ハテ扱世にはうつけのお侍も有る者じやのう」ト合方に成り上手より淺田奥女中の拵へ以前の腰元四人付添ひ出て來り」 淺田「是は」く龜井様には能うころのお入り奥様只今の様子を聞遊ばし厚うお禮を申上げとの御口上にムり升る 二人「誠に如何なる珍事を引起さんかと」 彦

胸を痛めおつたる所計らす君のお越しに相成り 金「主君の耻辱にも相成らず 十」武士の一分相立しも龜井公の皆御厚志」 四「何とお禮を申さうやら 皆々」有難う存じ升る 熊「何の」く先年予は討果さんと致せし迄思ひ詰めたる上野介なれば少しは恨みを晴したわい 四「シテ今日の 皆々」御入來はな 熊「ちと家老中へ心得の爲申入度義があつて 又」何我々共か 彦「心得の爲とは 熊」去れはお聞やれ○予も先年正使響應の其砌り上野介毎度の無禮只一刀に刺殺し直に其場で切腹と思ひ定めて登城成せしに昨日迄とは事變り我へ指南の詞の懲罰終に殺すにも刀なまり歸館致して様子を聞けば家老共が計らひにて彼へ音物を送りし由扱は金銀に心迷ひ忽ち替る彼の心底と思ひしが長矩殿の役義に付ても不禮致すは必定なれど只何事も家大事身を大切と思はれなば此能登守がよき手本と此由主人へ申聞せよ 又」スリヤ龜井公響應の役をお勤め遊ばされし節左様な事が候ひしか尤財寶を好めるは我人共に人心の常なれば此方敢て珍らしとは仕らぬ 彦「又賄賂を以て此度のお役を勤めしと有ては主人の耻辱と申もの 熊」去れは相手か誠の武士なれば假令音物を送る共受へき筈にはあらね共何を申すも相手が小人萬一役向に間違ひあらばと差出がましき義なれども水魚の囚みを失はぬ能登守が寸志迄 彦「其御厚志は忝うは存じ升れと私しならぬ公用をば上野介殿疎略な義をは致へられては公儀へ對して濟ぬ計りか 又」第一上使へ對して無禮其罪いかで遁れ得

んや左すれば強ち金銀を賂して譏りを主人に蒙らしむるは臣たる者の不本意と申もの 熊
 ア、イヤ御家老様只今承れば龜井様にも先年不禮がありしとの事前車の覆るを見て後車の
 戒めども成るへきお諭し 十「既に只今の如く非を理に任けても一旦の詞を立通さんどある
 上野介殿 金「万一此度のお役に付殿中にて無禮の振舞でもある時は悔んで返らぬ跡の災ひ
 瀧「よくく夫等の 皆々御思案をば 幸ハテ假令無禮の振舞ある共公用に付ての義なれば
 又「強ち弓矢の耻辱にも相成るまい 熊「ハテ内匠頭殿は氣の毒千万〇能登守年始のお禮に參
 りしとよきに此由傳へておくりやれ 瀧「スリヤ龜井様には最早御歸宅でムり升るか 金「イ
 ヤ御家老當家と御懇意なればこそ仰せ下さるお詞をば 十「お用ひなくば君への失禮且は殿
 の 皆々お役向にも 又「賄賂を以てお役を勤る 幸主人でないわい 熊「ハテ長矩殿には
 よき家老を持たれしよな 瀧「せめて龜茶など御一服 熊「費を厭ふ家老の手前馳走になるは
 氣の毒千万 皆々ではムり升れど 熊「エ、馳走に成りには「ト刀の下緒を捌くを道具替り
 の知らせ」 熊「參らぬわい」ト立腹の思入皆々手持無沙汰のこなし此仕組宜しく早舞にて返
 し

造物舞臺元の道具爰に長棒の乗物を置仲間二人立掛り居る此見得通り神樂鞠唄にて道具納
 る 〇「モウお殿様のお歸りに間も有るまいに駕脇の衆迄何所へ行たか大方仲間のやつらは
 片足上げて居るに違ひはない一所に行て呼んで來やう 今「チ、ろんなら八平 〇「サア行う
 「ト上手へ這入る門の内より作藏お民和助出て」 民「今年で丁度五年の間お目も掛らぬ其内
 に三平様にはテモよいお侍にお成り被成れた事じやわいなア 和助「作藏今兄者人の仰せ通
 り是非某はお暇を願ひ參る程に此由親人へ傳へてくりやれ 作藏「親且那樣には是非御兄弟
 御一所どのお詞でムり升たが殿様の御大役中上へ對して濟まぬどのお詞も御尤どうかお役
 の濟次第三平様にもお越しに成り升様おつしやつて下さり升せ 和「ソリヤ兄者人として母の
 御病氣當三月上使御下向のお役が濟まば直様兄も參る心底 民「ならう事なら今度は三平様
 に去てはしいものじやなア 和「サア其儘に成らぬが勤の身の上然之親御のお待兼お禮は作
 藏其方より申してくりやれ 作「畏り升てムり升る 和「返すくも母人の御介抱さ怠りなさ
 やう 民「及はずながら私も共々 和「何から何迄御深切お禮は其節又改めて 民「何のお禮に
 及び升せう三平様の親御と思へば大事にせねはなり升せぬ 和「然らば作藏お民殿 作「お登
 りの日を 民「お待申でムり升せう「トお民作藏向ふへ這入る」 和「思ひ寄らさる國元の知ら
 せア、何うか御全快がさせ升たいものじやなア「ト後ろにて」 熊「能登守様お歸り」ト門の
 内より能登守先に淺田腰元四人送り出て來り」 瀧「龜井様にはか心悪敷き御様子をば奥様
 かお聞遊ばされ殊の外の御心痛若し只今申されし家老の詞がお氣に障り升た義おれば 熊「

何のく小人の詞は敢て取合はねは心に障る事もない必らず御心配下されなと奥方へ傳へてくりやれ 和「淺田殿何かお客人へ御無禮でも 淺「サア殿様のお役の事に付折角仰せ下されしを 和「何殿様お役の事とは 能「ソテ其方は當方の臣か 和「ハッ私事ハ國家老大石内藏之助の吹擧に依て當家へ奉公致と荏野三平か弟同苗和助と申者 能「ム、其國家老内藏之助とは音に聞へし器量人なる由ア、惜しい家老が江戸にからいで○和助とやら初見參の其方へ能登守が當座の年玉取らすであらう 和「スリヤ此お扇子を拙者めへ 能「心あつて取らす扇子開いて見やれ」ト和助扇子を開き」 和「コリヤ是扇子は堪忍の 能「二字をお記し被成れし賜物 能「堪忍の二字は侍たる身の鎧兜内匠頭殿命せられし此度の大役は其堪忍の鎧兜で身を堅めずは其身に怪我の 和「エ、 能「イヤサ某先年勤めし節堪忍ならざる所なりしが家老共の計らひに依て今身を全う致すのも皆其二字に籠りし故常に所持なす守りの扇子折あらは内匠頭殿へ予が斯く言ひしと申傳へよ 和「ソテ又其節御家來のお計らひと仰せらるゝハ 能「其義は只今家老へ申聞けたれと所詮彼等は○ノウ女中 能「夫は今一度私共が 能「イヤ物言へは唇寒し秋の風二度と申論は無益じや只此上は其二字をよくお守りある様と其方共の主人へ篤と 和「お心ありげな其お詞 能「及はずながら私共 能「兩人「仰せは胸に 能「ナ、ト氣味合あつて袖を返す和助は扇を疊ひ淺田は襦を捌く是を一時の木の頭」 能「疊んで

置きやれ 腰元四人「お立ち」ト上手にて」 大勢「ハア、」ト三人思入宜しく此仕組行列三重にて拍子幕

二幕目 吉良上野介屋敷の場

役名

一 淺野内匠頭	一 上島彌助
一 吉良上野介	一 灰谷藤兵衛
一 片岡源吾右衛門	一 仲間權平
一 左京亮奥方園菊	一 全園國松
一 粕谷平馬	一 手代善八
一 齋藤宮内	一 腰元四人
一 清水團右衛門	

造物向ふ黒幕上手に大鳥居下手葎簀園ひの茶店神樂にて幕明く「ト直ぐに下手にて」 權平「うしやアがれく」ト權平國松折助の拵らへにて狐を畫きし稻荷祭りの繪馬に紐を付是に錢を通して提げ生酔のこなしにて善八手代の拵らへにて權平に胸ぐらを捕られ出て來り」 善八「モンどうぞ御了簡下さり升せく」 能「糞でも喰らやアがれ今日は何だと思つて居るの

だ三の午の祭りだぞよ 國松「から達が稻荷万年講にかうして出れば何所の店へいつても一合ふりつゝ奉納しねへ所はねへのだ 樺夫に年中此屋舗へ商ひをして居なからたつた三文のお初穂とは何だ 善私店では毎年當御屋敷の初午祭りには油揚三十枚お備へ申が仕來りてムり升るが當年はか上の御用繁多とて三の午に延び升て今日も油揚をお備へ申たに其外に一升かへとおつしやつては御無理でムり升る 樺何だ無理だ此番頭め打さべろ」ト兩人にて善八を打にかゝる上島彌助灰谷藤兵衛着附羽織袴高股立大小一文字の菅笠を持駕脇の侍の拵らへにて出て來り「彌助是はしたりか仲間様子は只今承はりしが夫りや御手前達が無理といふもの 藤「今日の處は歸してやるがよくムる 國「ヤイ／＼飛んだ所へ出しやばつた 樺「一体うぬは何所の家來だ 國「我々事は今日當家へ參つた淺野内匠頭の家來じや 樺「道理でしみたれた面ヲがして居ると思つた今度傳奏の馳走の役を勤るとてうるさく屋敷へ出てうせれと終にかれ達へ付届け一つ仕ねへけち／＼大名 國「夫に引替へ相役の伊達様は知行は僅だか今度指南を受るに付てから達迄毎度付届けを下さるがまたうぬらの主人又は三文の錢も貰つた事はねへぞ 樺「夫に無理とは何が無理だ 善「モン私の事を此御武家様方の御迷惑に成ての齊ぬぞうぞ御了簡下されい／＼ 樺「エ、元はといへば此野良 國「どいつもこいつも覺へて居やアがれ」ト善八の天窗をくらわし上手へ這入る」善「イヤ早無法なやつもあればあるものじやモンあなた方大きに御世話に成り升た」ト捨臺詞にて向へ這入る」

「何と藤兵衛どの當正月より度々參る折り毎に門番小者の主人の悪口 藤「夫と申も御家老方の吝嗇故の彼等が悪口どうか主君のお耳に入れ度ない者でムるのでう 彌「然し當家の主人にこそ未だ御歸館のない様子まづ御玄關へ參らうではムらぬか 藤「左様致さうサ、お越し被成れ」ト兩人上手へ這入る」ト知らせにつき道具返し

造物平舞臺後ろ淺黄幕具中に小さき石の鳥居左右玉垣所々に梅の立木福留稻荷大明神と書たる幟を立空より梅の釣枝都て吉良家庭中稻荷祭りの体毛氈をかけし床机を置園菊襦袢衣裳大名奥方の拵らへにて床机に腰をかけ左右に腰元四人扣へ上下に齋藤宮内稻谷平馬着附麻上下にて扣へ居る合方にて道具納る 宮内「是は／＼伊達公の奥方に能くこそ御入來今日當家稻荷の祭禮 平馬「よき折柄の御入來なれば御酒一獻差上度うムり升れば此方へ御案内申せと主人の 二人「申付にムり升る 國「只今内匠頭殿御家來の申を聞けば御他行のよし承りしに上野介様には御在邸でムり升るの 善「イヤ其他出には子細のある事伊達公の奥様故申升るが内匠頭殿去年極月饗應の役を命せられしより古實格式の指南申せと今に於て覺へ玉はず主人も餘りうるさき事に思召し他行と申て御斷り申せしなれど最早傳奏の下向も來月初旬と極りし故主人の戻りを待拵へてムるがイヤモウ迷惑を致し升るてハ、

平「夫に引替へ御相役の左京亮様一を聞て方を知る御發明其御主人が秀才故奥方始め御家老中迄機轉の利た御音物」
 宮「上は元より我々迄莫大成る御目錄を頂戴致し三人」
 千万忝う存じ升る
 圓「其御禮を受け升ては却つて痛入り升尤我夫には御馳走役なれども内匠頭様とは事替り式法古實も辨へぬ愚か者お役事なう勤めかへせ升るも上野介様のお教へ一つ其御願ひ旁々推參致せし此園菊」
 平「是はく其お頼みがないとても御指南申は主人の役目」
 宮「其當日には上野介お傍を離れず万事お差圖仕れば決して御案事は御無用でムり升る」
 圓「其詞を承り安堵致してムり升る」
 平「然し主人の申付け」
 宮「何はなくとも御酒一献」
 圓「折角の思召を辞退致すも返て失禮」
 慶元〇「左様なれば私共も」
 △「お供致すで」
 四人「ムり升せう」
 兩人「然らば奥方」
 圓「イヤ御案内」
 ト立上り膝の塵を拂ふる木の頭」
 圓「下さり升せう」
 ト會釋をする此仕組よろしく神樂よて返し

造物平舞臺襖通り桐の紋散しの金襖橋掛り戸家口とも杉戸の見切り大欄間をひろし都て吉良家客間の体爰に淺野内匠頭熨斗目織上下の拵らへにて住居書院葺盆を扣へ居る合方時計の音にて道具留る
 内匠「今打つ時計は申の刻今朝より上野介殿の御歸邸を相待てども今に於て御沙汰のなきは〇御家來く」
 ト手を鳴らす奥より清水團右衛門着附麻上下にて出て來り」
 團右衛門「オ、内匠頭様には未だ是にお出被成升るか主人公用の義にムればお歸りの

程はいつとも分らず先今日はお歸り有て又かといひでもお越被成
 内「左様でもムらうなれど傳奏の御下りも近々とのお達し先達より度々お問合せ申せども御用繁多と有て未だ御指南に預らず公家堂上の饗應の古實かつて存せず是非とも今日は御目通りの上夫等の儀式を」
 圓「是はしたり御存じないはそこ元の不念といふ者其指南が受け度くばなせ前々より御問合せ被成れぬぞ」
 内「サアうこでムる只今迎も申通り昨年極月十五日月番の執事土屋相摸守殿より釣命を傳へられしより毎度推參仕れども」
 圓「夫が御自分の意りと申者院使方の饗應司伊達左京亮様には仰せ付られし其後退出より直様當家へ駕を任せられ御指南を願はれし故最早古實万端御會得夫に何ぞや御自分様の家臣を以て言越れしはしたい主人を蔑るに召る、故斯様な事が出来申」
 内「成程其義は某が不念なれども申さば公儀の御用にして例年の式禮萬一齋相のある時は上野介殿の意りにも相成る義なれば何卒今日は御對面の義を願ひ存する」
 圓「ハテ扱お歸りの程は分らぬと申おるに」
 内「ソテ明日は御在邸でムるよな」
 圓「公儀の御用にムれば主人にお逢ひ被成度は來る年の明くる年優曇華盛りを見に出だ時にお越し被成れい」
 内「ヤ何と」
 圓「とつと早くお歸り被成れ」
 ト奥へ這入る」
 内「ム、」
 ト思案のこかし奥より園菊出て來り」
 圓「是はく内匠頭様には是にお越しでムり升るか」
 内「オ、是と左京亮殿の御内室」
 テ當家へは如何成る義にて」
 圓「さればお聞下さり升せ去年上み

より命せられし獲應の役目滞りなく勤め升るやう右御願ひに吉良様へ 内「某とても夫故に
 参りしなれど折悪しく吉良殿には他出とあつて未だ御意得ずシテ御自分にも上野殿の御歸
 り迄 國「イエ妾は事は吉良殿にお目もじ致し最早歸館致し升る 内「スリヤ上野介殿にはア
 ノ屋敷にゐらるゝと 國「いかにも今朝よりの御酒宴と相見へ餘程御酩酊にムリ升る 内「
 ム、餘人には逢ひなら此内匠頭に對面せぬは○ハテナア 國「然しなから妾は事はちと屋
 敷へ急ぎ升ればあなた様には御ゆるりと」ト橋掛りへ向ひ」 國「コレ腰元共く」 腰元「ハア
 、」ト以前の腰元四人出で」 腰元「奥様には最早御歸館にムリ升るゝ 國「タイのう○左様な
 れば内匠頭様」ト内匠頭思案のこなし」 國「いか様此度の大役をお勤め遊ばす夫迄は御心痛
 も御尤シタガ今上野介様のお詞ではお氣もじなから他人の差出も ○「左様なれば △「イヤ
 奥様 國「ドレ退出の致し升せう」ト腰元四人付添ひ向ふへ這入る」 内「ム、扱は此程より他
 行に托し又ハ公用に事寄せて應對せざるは察する所前年山田宗偏が掛物彼一休が墨跡を論
 じ耻辱を取りし其意趣を今爰へ持出せしと覺へたり思へば卑怯至極の振舞此の上は奥へ踏
 込み對面なさんか○イヤ」ト此度の役目勤め終る夫迄はいは、師範同然の上野介無禮があ
 らば猶つらく當るべしハテ如何致した者であらうな」ト向ふより片岡源吾右衛門麻上下の
 拵らへにて走り出で來り」源吾「殿夫にお渡り遊ばし升るか 内「ナ、源吾右衛門か何事なる

ぞ 源「某参上仕りしはお役ふ付ての一大事○御免」ト舞臺へ來る」 内「何役目に付ての大事
 とは 源「去れば先達て上野介様のお詞にハ上使御下向の節は上野東叡山へ御社参續いて芝
 増上寺へ御佛参ある事毎年の格式にて其時宿坊に於て御膳差上る事との仰せ然るに今日芝
 増上寺宿坊より副使の宿坊よては先達より御相役の伊達左京殿二百餘疊の疊を悉く新らし
 きを入替へ壁の上塗り障子の張替へは勿論湯殿雪隠に至る迄滞りなく普請出來せしに此寺
 は此儘にてよく候やとの使僧の口上聞くと齊しく早速伊達家へ聞合せ候處吉良殿よりの指
 圖を以て宿坊の洒掃致せしよと副使方さへ斯くなれば正使の宿坊餘も其儘では相濟むまじ
 と馳参つてムリ升る 内「何スリヤ相役伊達家に於ては上野介殿の指圖を以て宿坊の營繕致
 せしとな左程の義なれば此方へも一應の指圖あるべきに何事も指南せざるは飽迄我に遺恨
 を含み其場に至つて耻辱を與へん下心に相違おし 源「正使副使にも來月十一日には品川驛
 御着との事左すれば猶豫おらざる手違ひ我君如何計らひ升せうや 内「副使方の宿坊すら普
 請せしと有るからは如何で其儘置くべきや晝夜をかけて普請の手配まづ宿坊へ○つゞけ
 源「ハッ」ト内匠頭ツカ」ト花道へ行」 内「内匠頭が馬引け」ト戸家の内にて」 大勢「ハア
 、」ト櫓の音さす」 内「ソレ」ト内匠頭源吾右衛門向ふへ走り這入る奥より上野介白髪かつ
 ら羽織衣裳少し酔て居るこなしにて平馬宮内に手を取られ出で來り内匠頭の跡を見送り」

にて幕明く 長吉「ヤイ」手前達は手が離れたと思つて歌なんぞを諷やアがつて夫で濟むと思ふか 熊五郎「夫が左官や何ぞは間抜けと言ふ者だ 傳次「おらが方の仕事を見や上ツつらの見場さへよければ夫でいゝのださうして經師屋さんの仕事はどうだ 九兵衛「イヤモウ私共の仕事は夜なべの利かぬ故座敷通りは濟升たがまだ」奥の天井が残つてムリ升 長吉「夫に役人が付ツ切りでせり立るけれどそう早くやれるものか夫ならもつと早う掛れはいゝに 傳「所でけふは高家方の御見分が有るさうだが首尾能く濟まして仕舞へば淺野様のら一同へ御褒美が出るといふ咄したが 九「夫を樂みに左官さんモウ一切りやり升せうか 長「ナ、夫がいゝ」ト向ふにて」 傳「御見分の御入り 熊「何だ御見分がお入りだこいつはかうして居られねへ 傳「然しこちからは手廻りだから庫裏へ往つてしたみでも削ると仕様 熊「さう仕へへ」ト四人上手へ這入る奥々十郎左衛門只七着附上下にて出て來り」 只七「御見分お入と有れば定めて御主君にもお付添ひでムらう 十郎左衛門「されば當寺の繕ひも荒方出來は致し居れど火急の事故どうかお咎めのない様に致し度ではムらぬか 只「如何様吉良殿の事なれば拙者も其義が心遣ひ 十「何は然れお出迎ひをば 只「左様致さう」ト出迎ふ向ふ々吉良上野介羽織袴の拵へ粕谷平馬麻上下にて刀を持ち次に齋藤宮内麻上下の拵へにて付添ひ淺野内匠頭羽織袴の拵へ片岡源吾右衛門麻上下の拵へにて刀を持ち伊達左京亮羽織

袴の拵へ次に内藤權太夫麻上下の拵へにて刀を持ち附添出て來る」 只「是いゝ」吉良様に御上使宿坊お下見の御役目御苦勞に存じ升る 十「淺野内匠頭が臣當寺營繕掛機具十郎左衛門 只「武林只七是迄お出迎ひ 兩人「仕つてムリ升る」ト上野介聞ぬ思入にて」 上野介「何と平馬副使方の宿坊を見たか左京殿は若手なれ共役義大事と思ふ故物を惜しまぬ普請の手厚さ何と能出來たでないか、平馬「夫に引替へ當宿坊見られたさまでこムリ升せぬイヤ何伊達公御主人のお褒でムるぞ 左京亮「ハッ是と申も吉良殿の皆お指圖今日の見分滞りかく相濟み斯様な悦ばしい義はムリ升せぬ 宮内「イヤモウ結構お御普請を見た目の辨か何所もかしこも薄きたなく蜘蛛の巣さへも拂はぬどの役目龜畧の内匠殿〇チ、是は淺野公ににお跡にお越被成しか夫共存せまいかひ失禮眞平御免被下升せう 内匠「イヤ」何か龜畧の義が有らは心得の爲遠慮かく 平「何の主人の差圖でさへ御用ひ被成ぬ長矩公が陪臣風情の我々が差圖を御請被成さうな事でムるろ 源吾右衛門「ア、イヤ左様に仰せ被下な主人も役目の義にムれば悪敷所何々度も 上「中々此結構な御普請に点を打つへき所が有らうか先お座敷を拜見致さう」ト皆々舞臺へ來る」 十「ハッ御主人始め伊達公にも 只「先づお席へ 兩人「お着有られ升せう 上「内匠頭殿是なる仁は御家來でムるか 内「ハッ 上「うろ付廻つて邪魔な御家來何ぞ用でも有つての事」 只「只今迎も申上る通り此度當宿坊營繕の掛りを仰付ら

れ付たる。上「拙者事は。上エ、名を聞には及ばぬわい。」ト上野介懐中より目鏡を出して當りを見廻し。上「内匠頭殿當寺は正使の宿坊なれば尤見事と存せしにアノ襖はアリヤ何でムる紙の織ぎ目に糊の溜り。又壁杯もすぐれて悪しく疊さとりも甚だ庵末是と申も金銀を厭へる。故一つとして碌な事をし若し不調法が有る時は貴殿の庵相は手前の庵相左程金銀が惜しくは執事方へ断つて退役さつせへ。内ア、イヤ上野介殿御立腹の段は御尤には候得共先達て家老共を以てお伺合せ申せし節通例の通りどのお詞故其分に致し置く所相役伊達殿には貴殿よりの御差圖と有つて宿坊營繕致されし由承りし其日より俄又夜を込め致せし故見苦敷は見ゆれ共費を厭ふ杯とは思ひも依らず左程の義なればなせ一應御差圖は被下ぬぞ。上「夫が貴殿の庵忽といふ者斯程の大役を勤め乍ら家來任せにせらる。故斯様な庵相が出来申た。〇知れざる事はなせ直々御自分參つてお尋被成ぬ。内アイヤ時々參上致せしなれども始終御他行と申事よて。上「コレ。夫が御自分様の利口立と申者貴殿公儀の御例を知らば諸事我儘に勤められよ。左ア、イヤ吉良殿仰せ一々御尤にこムれ共拙者に致せ内匠頭殿にせよ馴れぬ大役故公用繁多に付ての義ならん御家來左様で有らうがな。源ハッ如何にも左京亮様の仰せの通り主人公用繁多に候得ば。只當宿坊營繕の義も皆家來共の不調法何卒庵相の段は御高免の被下升て。上「此上乍ら主人内匠頭御用首尾能く相勤られ升る様御引

廻しの程。源偏に願ひ。兩人「奉り升る。平「スリヤ此程上使への進物も又宿坊の庵末な普請も。皆お手前達の不調法じやといひる。ウ。〇イヤ何御主人彼等が不調法じやとムり升れば先今日の所の御慈悲を以て免るしてお遣り。兩人「遊ばし升せう。上「ム、彼等如きが詞をば取上るには有らね共心得の爲なれば申聞かすが惣じて主人の心附ぬ事は心を付るが家來の役じやなりや萬事に氣を付て進物贈物等に付ても随分庵末のない様に致すがよいぞいか。ト進物の催促をするこゝし有つて。上「扱内匠頭殿最前より手前の詞が嘸か氣に障はり升たでムらうが畢竟御公儀を大切に存する故必ずお心にさへられぬ御免被下。ト。ト態と辭儀をする橋掛りより上下侍一人進物臺に掛物の箱を乗せ持ち出て來り。侍「權太夫殿。ト招く權太夫立て行く侍小聲にて何かいふこなし心得進物を受取る侍は下手へ這入る權太夫こちらへ來り手を突き。權太夫「吉良殿へ申上する只今家老共よりの申越には上野介様には茶事をお好き遊ばすと承り庵末なる床掛にはムり升れど差上呉れよと持參の一軸お屋敷へ持參仕升せうや一應伺ひ奉り升る。上「何左京亮殿の家老中より床掛けを贈られしとか。〇夫は千萬忝なれど軸物なれば御辭退申。〇折角被下し物をお返し申し失禮なれど軸に付ては去年是に居らる。淺野殿と木下邸へ招かれ墨跡の目利を頼まれし所正眞の墨跡を偽物なりと横合から口出しせられし照月の一軸内匠頭殿貴殿定めし覺へがムらう満座の

中にて某が目利を破りし程の博識又彼是と非難が面倒宮内御返し申せ「ト突遣る是にて噂の箱ばつたり落ちる宮内取上げ重みを引く事有つて」宮「是はしたり御主人如何致たものでん此箱書を御覽遊ばせ山吹とムリ升るぞ」ト持たす上野介重みを見て「上「是はく箱書に心も付かずいかひ産相を任つた實は身共も又一休の墨跡と思ひの外成る山吹とは大方井出の古歌成るゝ但しは道灌の畫軸成るべし斯様な品は内匠殿の一向心掛けのない所能くころか心が付かれ申た流石と左京亮殿の御家來程有つて万事抜目なき贈り物○コリヤ平馬宮内御禮申せ」宮「ハッ御覽の通り主人の恐悦千萬忝う存じ升る 平「どうかお歸りの節は御家老方へ 兩人「宜敷う 權「是はく別してもなき品御意に叶ひ取次の拙者迄斯様な悦ばしい義はムリ升せぬ猶此上共主人の 上「イヤ其義は前々申通り某御傍に付添居れば御心配被成ぬが能ムるぞ 左「シテ御料理の献立は 上「夫は見計らふて置つしやれ然し物入の多い中成る丈け質素がよくムるぞ」ト源吾右衛門是に付て献立を尋ねるといふこなし内匠頭始終無念のこなしにて懷中より献立の書附を出し」内「イヤ吉良氏シテ正使饗應の献立は是で宜敷候や御披見願ひ奉る」上野介態と聞へぬこなしにて左京亮に向ひ」上「そこで第一古實と申は御答大禮の節御間飾りの口傳事なれ共是は度々御指南申たれば餘も御失念はムるまいよしお忘れ被成た所が某御傍でお指圖申さう 内「上野介殿」ト上野介の袖を引」

上「エ、何をかつしやる 内「御膳部献立の義は 上「身共耳が遠いと申すに 左「イヤ何吉良殿上「何でムるな」ト和らかにいふ」左「シテ當日の衣服の義は 上「イヤ夫も跡より御沙汰申せは諸事萬事某にお任せ被下決して悪うは致申さぬ 内「上野介殿 上「エ、うるさう何でムるか 内「御膳部の献立は是にて宜敷うムるか」ト差出すを上野介引たくり目鏡を掛け見て」上「内匠頭殿こりや何だ魚鳥を以て美を盡くしたる膳部の献立當増上寺御佛參の畫飯ノ精進物のお料理は例年の格だは 内「スリヤ用意万端調へし 源「アノ今日の 四人「御料理は 上「一品も役に立ぬ早く料理を仕替へさつせへ」ト書附を捨る内匠頭むつとするを」源「アイヤ我君御參詣は午の刻との兼てのお達し未だ餘程の間もムれば○ソレ此段をお料理方へ早く」只「畏つてムリ升る」トうるたへて橋掛へ入る」平「イヤ何我君御正使の御登城は午の正刻 宮「御乗物の裏門へ廻りし置升たれば片時も早く御登城を御急ぎ有つて 兩人「然るべう存じ升る 上「如何も左様致すで有らうイヤ左京亮殿」ト立上る」内「スリヤ今日と聞及び玄 源「アノ御正使の 兩人「御佛參は 平「例年極りし 兩人「大禮の翌日 源「スリヤ調へしお料理迄 上「今日の饗應の間に合はぬのも不念だわへ 内「シテ大禮の御登城は 上「則今日午の刻 内「エ、○スリヤ明日と仰せありしアノ大禮は今日とな 上「夫故登城急がにや成らぬ」ト行うとする」内「シテ今日の衣服の義は 上「昨日お能の節の通りだ 内「スリヤ腕斗目

麻上下を着用と云 左「左様ならば上野介殿 構我々共にも 構左「御同伴 内「シテ今日の御用は如何 上「殿中にて問合せへ○サア参り升せう」ト上野介先に左京亮權太夫平馬宮内進物を持ち奥へ這入る内匠頭こらへ兼しこなま有て奥へ行うとするを」 源「こりや我君には屹相して何れへお越し 内「被成升るぞ 内「ハテ知れた事相役たる左京亮には手を取る如く万事指南をなし乍ら我にのみつらぐ當るも彼宗偏が掛物の遺恨を含む彼が心底左すれば長矩が此度の役目所詮首尾よく勤まり難し既に昨日傳奏屋敷にて討果さんとは思ひしかど正使の着座を顧みてじつと胸は撫しなれど今日の手違ひといひ一つも仔細を傳へねば是より登城なせばとて正使の前にて何をかせん又も満座の其中で耻辱を取らん夫よりこ一太刀恨みて鬱憤を散せんと思ふなり 源「サ、其御憤りは御尤にはムリ升れど千鈞の弩は鷄鼠の爲に其機を放さずとの先言腰拔なんどは相手に足らず大丈夫は聊の義を耻とせず忠義を守るが誠の武士若し此心を取違へ御庵相坏是有らばお家の瑕玷御先祖様への御不孝にムリ升るぞや 十「殊には御場所柄といひ假令如何程の義がムリ升せうとも只々御堪忍遊ばされて此御大役を首尾能くお勤め被下れうなれば臣下一同の大慶何卒お家に災の來らざる様御賢慮願ひ上げ升る 内「其家をも身をも内匠頭彼が無禮には替へ難いわい 源「サ、嗚御無念にもムリ升せうが必らずく小人の無禮をお身に掛け給はず一先づ御登城被下升様願ひ 内「

「奉り升る 内「ム、然らば登城致すであらう 源「スリヤ拙者等が御意見をば御聞入被下り升るか 十「ハア、御意承つて臣等が安堵有難う存じ升る」ト時の太鼓に成る」 源「ヤ、アリヤモウ巳の刻 内「衣服を持って 源「十「ハッ」ト源吾右衛門十郎左衛門は刀を取て突く内匠頭は袴の紐を解く是を一時の道具換りの知らせ」 源「十「御供揃ひ 内にて「ハア、」ト此仕組宜敷合方にて返し

造物平舞臺見付松を畫きし金襴同じく大欄間をかるし橋掛り戸家口杉戸の見切り都て營中松の間の体爰へ品川豊後守大友近江守大澤左京太夫畠山民部少輔大紋立烏帽子の拵らへにて住居時の太鼓にて道具納る 品川「各々職分とは申乍ら傳奏御下向此方日々のお勤め御苦勞千萬 三人「役目は互の義でムる」ト橋掛りより梶川與三兵衛大紋立烏帽子の拵らへにて出て來り」 與三兵衛「是のく方々には今日のお役目御苦勞に存じ升る 大友「どなたかと存ずれば三の丸様の御留守居 四人「梶川與三兵衛殿 與「シテ吉良上野介殿には 大澤「其吉良氏には増上寺宿坊營繕の下見とて 畠山「未明より立越され未だ歸城 四人「致され申さぬ 與「拙者今日桂昌院殿御名代仰付られ候得共事馴れざる役目故一應御伺ひ申度参りしが何れも高家の各方シテ御正使副使方への御挨拶は何れの間に仕り升せうや 品「正使の間はお白書院にムれ共古老の吉良氏を差置て我々御差圖仕り 大澤「萬一儀式相違の時は三の丸様へ

對しても相濟まざる今日の大禮 大友暫時夫にお扣へ被下最早吉良殿の御歸城に 四人間もムるまい 與然らば是にてお待受申でムらう「ト向ふより上野介左京亮大紋立烏帽子にて出て」上野介左京亮殿お席に於ては只今お教へ申せし通りよくムるか 左京逐一會得仕てムり升る 與貴殿は吉良殿只今御歸城 皆々被成れしか 上「是はく同勤の各々には留主中何かと御苦勞千萬シテ内匠頭殿には最早登城致てムるか 與イヤ長矩殿には未だ登城四人「是なき様子 上「何をうるく致ておるう役目籠畧の内匠頭殿所詮是では覺束ない 大友「其役目と申せば桂昌院様の御名代梶川殿が 四人「何か貴殿へ 上「御問合せか 與其義に付て先刻よりお待受け申てムる 上「ア、何に付ても吉良一人御用繁多の今日杯はちと手助けも有るべきに高家多く有りといへども是等の差圖が成らぬとは左京亮殿吉良がなうては夜が明けぬと見へ升わい 与御繁用の程御推察の仕る 與「何は然れ吉良殿には 皆々「先々はへ 上「ア吉良が知行は安い者の「ト上野介のびを仕ながら舞臺へ來り」上「シテそこ元の問合せは 與「今日の儀式の順列且はお出迎ひの義等を 上「コレく梶川殿物を長ういはつしやるな拙者御用繁多でムれば早いがいよく 與「ア、イヤ吉良殿御繁用は承知致せと忝なくも將軍家の御母堂桂昌院様の御名代たる梶川與三兵衛万一鹿相の有る時は拙者計りか貴殿のお役が相濟まい夫故お尋ね申が互の役目長うは申さぬ御出迎は如何致ぞ 上「是はし

たり與三兵衛殿決してお腹をお立被下るお貴は拙者も事繁きに取紛れ三の丸様の御名代とも辨へず鹿言の段は眞平く〇イヤ何桂昌院様には御隠居といひ殊に女儀の事でムれば決して其義には及び升せぬ又正使副使への御挨拶將軍家御對顔の濟みし跡〇是は拙者其席に於てお知らせ申さう 與諸事然るべく様お願ひ申す「ト向ふより内匠頭熨斗目麻上下にて早足に出て來り舞臺の人数を見て衣服の相違せしを見て驚き跡へ引返さうとするを」上「ア、コレく夫へお越し被成しはとなたでムる「ト内匠頭是非なく花道にて」内「淺野内匠頭にムり升する 上「貴殿今頃登城を召れたのか 内「ハッ増上寺宿坊に於て聊手間取り遅參の段は眞平御免被下升せう 上「コレハ内匠頭殿先刻も増上寺にて拙者何と申た大切ある大禮の當日なれば早く御登城有れかしと申せしに遅參御免で相濟み升るか行司に預るそこ元なれば夜の目を寝ず共勤ひべきに御用を御用と思はぬ故諸事万事が此通り手間取らば左京殿も遅參すべきに御用も同じ御用成るに伊達殿を見られよ疾くに登城致てムるぞ〇是はしたりお手前方にも古實を正す職分で有り乍らなせ内匠頭殿を咎め召されぬ衣服が相違致してムるぞ 與誠に熨斗目麻上下内匠頭殿衣服が相違 四人「致してムるぞ 内「ハッく大擧實殿當務にあり乍ら衣服の相違は見苦し 與「今日の大禮は元朝の儀式に同じと吉良殿より仰せ渡しが有つたでムらう 與よしや仰せがないにもせよ自身勤める職分を思へば 大友

「あせ一應お問合せ 四人」成されぬぞ 内「ハッ／＼其義先刻増上寺にてお尋ね申せし所昨日お能の節の通りと仰せられし夫故に 上「ろりや誰が申た 内「お手前殿が 上「だまらつしやい今日の大禮には装束は元より古實數多有る故に疾くよりお尋ね有れと申せしに一存の了簡にて事を致す夫故に斯様な寵相が出来るといふもの儀式に背いて今日の饗應司が勤り升せうか何れも大紋立烏帽子でゐるぞ 内「扱は最前いひし詞も諸侯満座の其中にて此内匠頭に面目をば 上「ヤ「ト内匠頭こちらへ兼ねしこなしにて息込むを」 左「アイヤ内匠頭殿最早御上使お入りに間もなし 奥「御用意有らば早く衣服を召替へられよ 内「デハムれ共所詮是では 上「そこ許杯の勤まる役ではゐらぬわい 内「夫を思へば「ト急度なる」 奥「殿中でゐるぞ 内「ハッ「ト氣を替へ向ふへ逸散に這入る」 上「何と各々御らうじたか餘まり己れが我が過ると皆アノ通りでゐるての○サア左京亮殿御間飾りを拜見致さう 左「御苦勞乍ら 奥「左様ムらば 奥「上野介殿 上「お手前方にも御同伴 四人「先づ／＼「ト皆々上手へ這入る」 奥「いつに替らぬ上野介が無禮長矩殿の面色といひ○アどうか式事の終る迄事なき様に「ト素袍の袖を刎ねるのが道具替りの知らせ」 奥「致し度いものじやがア「ト思案のこなし此仕組宜敷早舞にて返し

造物平舞臺見附真中三間の間杉戸左右金張り牡丹の彩色畫大欄間をゑるし都て營中の口の

体右の鳴物にて道具納る「ト向ふより内匠頭走り出て舞臺へ來り」 内「淺野内匠頭が家來の居らぬか／＼「ト奥「源吾右衛門出て來り」 源「我君御用にムり升るか 内「大紋の用意は有るか烏帽子を持って／＼ 源「ハッ／＼○磯貝氏只七殿お挾箱／＼「ト奥より十郎左衛門只七挾箱を持って出る」 源「ソレ大紋烏帽子を 兩人「ハッ」「ト挾箱の中より素袍長袴立烏帽子を出し挾箱の蓋に乗せ出す」 内「源吾右衛門能くを用意を致して參つた是があくば内匠頭今日の御用が勤まらぬわい 源「スリヤ今日の 三人「お装束は 内「昨日の通りと申せしは内匠頭に耻辱を與ゑん吉良が奸計 源「スリヤ増上寺に於て 十「申せし詞は我君に 只「耻辱を取らせん 三人「偽りなりしか 内「重ね／＼の恨みの鬱憤飛掛つてとは思ひし成れど殿中の掟を守り胸を撫りし内匠頭が心中推量の致せ 源「よく御堪忍遊ばし升た其御苦勞も今日一日 十「翌は御病氣遊ばすとも 只「御大禮さへ恙がなくお勤め有らば 三人「上みの咎めも 内「チ、○素袍を持って 三人「ハア、「ト祝言の謠に成り内匠頭三人手傳ひ大紋を付け長袴をはき腰板をつける内匠頭烏帽子を冠り」 内「アリヤモウ御上使登城の祝言「ト袴の紐を結び乍らつか／＼と花道へ行くを」 源「アイヤ我君返す／＼も御短慮をは 内「チ、殿中は心得居るわい 源「其お詞を承り 十「我々安堵 三人「仕つてムり升る 内「夫も堪忍仕難き節は 三人「エ 内「時節と思へ「ト向ふへ走り這入る」 兩人「源吾右衛門 源「お両所此程より不禮をばお堪ら

へ有りし我君なれど常に變りし御面色と言ひ重ねくの慮外を思へば 兩人「エ 源イヤか
案事申事も有るまい 只「デモ只今の 兩人「御意がどうやら」「ト源吾右衛門前に有る中啓に思
入有つて」 源「チ、餘程御心せさ」と相見へお中啓をお忘れ有りしか「ト取り上げ見て」「ト」
ヤこりやお中啓の 兩人「親骨が 源「先刻調べし其時は何事もなき此骨のいつの間にやら離
れしは 只「若しや御身に 兩人「凶事ある知らせで 源「ア心に掛る」「ト中啓を取り落すのが
木の頭」「三人「事共じやなア」「ト思案のこなし祝言の謠にて返し

造物元の飾付右の謠にて道具留る「ト向ふより内匠頭出て來り花道にて」 内「ヤ最前座せし
松の間のお廊下に人なきは吉良は何れへ参りしる最早上使の御登城には程もなきにア、如
何致したものであらう「ト上手より品川豊後守嶋臺を持出て來り花道へ行くを」 内「夫へ
お越し被成るゝは高家品川豊後守殿長矩お尋申度義がムる 品「内匠頭殿只今衣服を改めら
れしかンテお尋ねとは 内「上使登城の節はお玄關の石段より下へお出迎ひに罷出升せうや
品「貴殿當務の人として今頃夫をお尋被成るゝか最早御上使お入りには間はムらぬおせ疾
く尋ねてお置き被成ぬぞ 内「サ度々吉良殿に聞合せたれど一向御差圖被下らぬ故 品「年々
傳奏の執達は高家替はるゝに勤むれ共吉良殿には古老の人なれば例年定つて御用を勤む
る其御師範さへなきに拙者お指圖申ては吉良殿へ相濟申さぬ 内「左様でもムらう成れ共 品

エ、御用の妨げ召るか 内「ハッ」「ト品川向ふへ這入る上手お大友近江守大澤左京大夫三
賢に大土器長柄の銚子を持ち出て來り」 大友「チ、夫に御越し被成るゝは淺野殿ではムらぬ
か 内「左様仰せ被成るゝは高家の方々能所で御意得申た「トつか」と舞臺へ來るを」 大澤
「貴殿何をうるゝ被成てムるお相役の左京亮殿に御用繁多に見へられるに 大友「最早御
用は 兩人「相濟み升たか 内「サ其御用を勤め升せうにも吉良殿に對面せでは○シテ上野介
殿には何れにムるぞ 大澤「サア何れにムるか 兩人「存じ申さぬ 内「スリヤ吉良殿には 大澤
イヤ大友氏「ト行うとする」 内「ア、イヤ近江守殿シテ御間飾は何れでムる 大友「御間飾は
大樹の御座夫を貴殿御存じはムらぬか 内「サア吉良殿へお出逢ひ申さぬ故 大澤「夫はろこ
許の龜相ではムらぬか 内「如何にも拙者が龜相故ろこ許方への此頼み「ト大友の袖を引く
を」 大友「左様に袖をお引被下るな萬一土器に龜相が有らば何と被成るゝ 内「ハッ」「ト驚き
手を放す 大友「うるたへた人ではムるわい 大澤「サア参り升せう「ト兩人向ふへ這入る上
手より畠山民部少輔三賢に駿斗昆布を乗せしを持ち出て來り下手へ行に掛けるを」 内「夫
へお越し被成るゝは高家畠山殿ではムらぬか 畠山「貴殿は淺野内匠頭殿何を御用でムるか
内「貴殿吉良殿を御存じはムらぬか 品「吉良殿は只今伊達左京亮殿に附添ひお間飾り相濟ま
せ御答の式且は饗應の古實の次第を御傳授被成てムる 内「何スリヤ相役の伊達殿には最

早御間筋りも濟まし儀式御饗應の古實迄 鳥サ貴殿が今日の御迷惑は高家同役の我々共實にお察し申せ共彼是申さば役向に不都合な廉がムる故お教へ申す譯にも参らず只吉良殿の機嫌をばろこねぬ様にお心付けられよ氣にさへ叶へば手の裏返す日此の性質見るさへお氣の毒でムる「ト向ふへ這入る」内「返そ〜も憎むべきは吉良上野介抑去年饗應司の台命を蒙りしより數度の無禮是にて宗偏が墨跡の遺恨も最早散すべきに一言の應答もなく手持無沙汰の憂目を見せ腹を慰せんとの心底なれをなせ尋常の勝負をせざるや武士に似合ぬ界法者今の堪忍成り難し恨み重成る吉良が細首討落して日頃の鬱憤「ト目釘をしめし急度思入有て」内「イヤ〜」最前源吾右衛門が異見と言ひ別して場所は營中なり大切成る大禮に私の怒りを以て亦傷に及びなば公儀へ對し不忠の至りと有つて上使入來の際迄何をすべき作法も分らずこりや何としたもので有らうか「ト橋掛りより上野介出て來り内匠頭を見てにつたり思入有つて上手へ行うとするを内匠頭思はず見てあはて〜大紋の袖に縫り」内「上野介殿 上誰じやどなたじや 内内匠頭先刻より貴殿のお越しをお待ち申た 上「チ、今日の御饗應司が何の御用か存せね共手前只今繁多でムる「ト袖を拂ひ行うとする」内「サ、御繁用でもムらう成れ共最早近付く上使の登城に未だ御間飾りは元より儀式饗應の古實迄何を致さう様もなく差當つたる役目の難義何卒御引廻しの程を 上「役目難義と思はつしやら

を登城も早く致されて聞合せでもする事か上使の見へる際と成り教へ呉れよといはれたとてさう手軽に参る程なれば御相役の左京亮殿進物持て手前が屋敷へ日々指南を受けには参らぬコレお手前様は横道者故今日の大禮を何でもない事と思ふてムらうが出合頭の立咄しで勤る役と思はつしやるゝ貴殿の鹿相は師範たる吉良が鹿相に相成れば最早拙者は御免を蒙る餘の高家を御頼み被成い 内「アイヤ吉良殿貴殿を師範に願ひしは老中方の御差圖にて私成らぬ上みの御用餘人を頼む程なれば貴殿の差圖を相待ち升せうや 上「かつ志やるな内匠頭手前を師範と思ひなば夫相應の取扱も有るべきに萬事隨意に召さるゝは師範を師範と思はぬ故夫でお役が勤まる者なら見事勤めて御覽成されい 内「其御用が勤まる程ならば長矩願ひの仕らぬ如何致せば貴殿の御意に 上「モウ何事も遅うムるわい「ト内匠頭無念のこなし向ふにて」彌込「御上使の御入り 内「ヤ、最早御上使登城と見へたり 上「ドレ左京殿にお指圖申さう 内「スリヤどう有つても長矩へは 上「假令指圖致せばとて田舎武士が何と致して「ト行に掛るをこらへ兼」内「吉良待て 上「待てとは何じや「ト振り向くを」内「田舎武士の切味見よ「ト拔打に眉間へ切り付る上野介額を押へ下手へ逃て行長袴の裾を踏まへる是にて上野介前へ倒れるを内匠頭其儘腰へ切付ける上手より梶川與三兵衛出て内匠頭を後抱に抱留跡へ引退かうとする上野介は逃げやうとすれど動かぬ思入三人の氣味合上野介

起き上るを内匠頭いらつて持たる白刃を打付る是を一時の道具換りの知らせ内匠頭と抱止
 られ乍ら無念のこなし上野介は烏帽子取れて眉間を押へ見得此模様宜敷く早舞にて返し
 造物平舞臺見付三ツ葵の紋散らしの金襴襦袢掛り戸家口杉戸の見切り大欄間をゐろし都て白
 書院の模様爰に大名大勢素袍大紋立烏帽子にて立掛り居る早舞にて道具納る 大勢「刃傷で
 ムる」
 ⊕「今日の御大禮をも顧みざるは不法の振舞 □今にも是へ乱入成さんも計られ
 ず ×何れもお席を 皆々「お立被成」
 「トうるたへて言ふこそし向ふにて」 淡路守「アイ
 ヤ何れも立願いで見苦敷いお席へ」
 「ト向ふより脇坂淡路守素袍大紋立烏帽子の拵らへ
 にて走り出て来る」
 ⊕「貴殿は脇坂淡路守殿立願ぐなどは殿中の ○「刃傷未だ 皆々「御存
 じ被成ぬか 淡其義は承知仕れど今日伺候致せしはそも何の爲ぞや斯る非常の事有つて萬
 一君の御前へも乱入致す其時は非道を制すが銘々の役目然るに未だ何者の所爲成りとも相
 分らぬ立騒がれてはまさかの御用に相立まじ各々本座にお着被成 皆々「ハ、ハア、」
 「ト下
 に居る淡路守靜に舞臺へ来る上手より久和茶道にて上野介を肩に掛け出て来る」 淡「見れ
 ば直垂血に染みたるは坊主誰人成るぞ 久和「是は淺野内匠頭殿何事の宿意にや刃傷に及ば
 れし吉良上野介殿にムリ升る 淡「フンスリヤ殿中の刃傷は ⊕「吉良へ對して 皆々「長矩殿
 が 上「御覽の如く御場所柄も辨へず」ト淡路守はろりと思入あつて」 淡「此程よりの無禮の
 段々こりや斯うなうては叶ふまじ 上「何と御意被成る 淡「斯様に烏帽子直垂を着用の場所
 柄に血汐の儘の通行は時に取つての不都合千萬 上「ヤ 淡「穢らはしいわい」
 「ト上野介の横
 面をはるのが木の頭吉良は坊主の肩に縫りし儘下にへたり兩人顔見合急度成る此模様宜し
 く早舞にて拍子幕

四幕目 田村郎長矩切腹の場

役名

- | | |
|-----------|-----------|
| 一 淺野内匠頭 | 一 多門傳八郎 |
| 一 田村右京太夫 | 一 大久保權左衛門 |
| 一 伊達陸奥守 | 一 磯田武太夫 |
| 一 庄田下總守 | 一 片岡源吾右衛門 |
| 一 田村室花町 | 一 足輕四人 |
| 一 磯貝十郎左衛門 | 一 腰元四人 |
| 一 菅谷半之丞 | 一 別當二人 |

造物平舞臺真中家根付黒塗の屋敷門扉をべ切り潜り門出這入りあり此左右青御簾を掛けし
 見張り窓戸上下なまこ塀左右に切手桶空より松の釣枝都て田村右京太夫門前の体爰に絹羽

織袴股立の足輕四人六尺棒を持立かゝり居る時の太鼓にて幕明く。○「何と各々今日殿中の騒動けしからぬ珍事ではムらぬか。△「されば相手方吉良上野介殿には大友近江守殿へ御預けと相成り。□「内匠頭殿には當家へお預け仰せ付られ御場所柄を辨へぬ不届と有て只今御上使御入來に相成り未の刻を限り切腹仰せ付けらるゝとの事。×「則刃傷は午の刻にて僅か一時の間に死を賜はるとは嚴敷御仕置お氣の毒ではムらぬか。三人「左様でムる。〔ト橋掛より片岡源吾右衛門磯貝十郎左衛門菅野半之丞出て來り〕三人「お願ひの者にムり升。四人「何事でムる。源吾右衛門「ハッ我々事は内匠頭家來の者承れば主人長矩今日當家に於升て切腹仰せ付られしとの事。十郎左衛門「何卒御當家様の御情を以升て。半之丞「存生の對面御免し下さり升やう。三人「偏にお願ひ申升る。○「スリヤ各々には内匠頭殿の。四人「御家來でムるか。三人「左様にムり升る。四人「シテ御姓名は。源「ハッ拙者事は側用人出頭を相勤め升る片岡源吾右衛門。十郎「同側用人磯貝十郎左衛門。半「中小姓菅谷半之丞。源「御前よしみに。三人「願はしう存じ升る。四人「暫時夫にお扣へなされ。三人「ハ、ハア、〔ト足輕四人潜りの内へ這入る〕。源「いかに各々御場所柄も辨へず上野介殿を刃傷に及びしとて即日死を賜はるとはお情けなき上の御咎め。十郎「既に神君の御制法にも喧嘩両成敗たるべしとあるものを吉良殿には殿中を憚り腰刀に手をかけずとあつて何の御咎も是れなく。半「其罪主人一人に歸し御切腹も是非なければ御領地御取上の上今晚中に江戸屋敷を引拂へとは片手打なる上の命令。十郎「時世時節といひながら。半「主も家來も一日に。源「斯く迄武運の傾く者か。兩人「源吾右衛門殿。源「御兩所。三人「ハア、〔トヒつと俯向く潜り門より以前の足輕出て來り〕。○「内匠頭殿の御家來。三人「ハア、○「只今主人より御上使へ願ひし所御老中方へ伺ひし上ならでは免し難しとの仰せ。△「左すれば存生の對面も叶ふまじ。□「因て側用人出頭たる片岡源吾右衛門一人は差ゆるし遣はすとの。四人「仰せでムる。十郎「スリヤ我々兩人には。半「御對面は。兩人「叶ひ升せぬか。源「アイヤ上みの仰せは是非もなし御尊骸は御舍弟大學之助様へ下し給はるとのお達しなればせめて死骸引取の御用意をば。十「アハムれど。兩人「只一日。○「三人の對面は叶はぬとの。四人「仰せでムる。十「是非に及ばぬ我々が願ひ。半「夫に引替へ貴殿一人ま見へ奉るとは。兩人「お浦山しう存し升る。○「御上使様御退出迄。四人「御門前には叶ひ升せぬぞ。兩人「ハア、□「御法なれば大小を御渡し被成れ。源「ハッ〔ト大小を渡し行うとするを〕。兩人「ア、イヤ源吾右衛門殿暫く。源「何事でムる。十郎「憚りながら君へ御對顔の節。半「御無念の程我々共。兩人「御賢察仕ると。〔トヒつと思入源吾右衛門はろりとしてそつと胸を叩き承知のこなし〕。四人「通り升せい。源「ハア、〔ト源吾右衛門足輕四人付添内へ這入る十郎左衛門半之丞は本意なき思入にて橋掛りへ這入る戸家の内にて轡の音して向

ふより紺看板馬柄杓を腰にさしたる別當二人先に伊達陸奥守熨斗目麻上下にて出て」陸奥守「案内致せ」兩人「ハッ」トツカ〜と舞臺へ來り」兩人「頼まう〜」ト門を叩く見張り窓の御簾を上げ」門番「誰殿でムる〜」陸奥守「身は伊達陸奥守綱村である淺野内匠頭切腹の義に付右京大夫殿に面會致し度趣意あつて下城より早馬にて駆付たり開門致せ〜」門番「スロヤ御本家陸奥守様に居らせられ升るか何事の御用かは存じ升せぬと今日の義は假令御父子の間にて出入させる事用捨あるべしと御老中方の御差圖に付御開門の義は相成升ぬ」陸奥守「ア餘人は格別當家一門の陸奥守何憚る事が有るべき苦しい綱村と申て明けい〜」門番「ではムり升れと御達しなれば御上使様御退出迄御通行の義は叶ひ升せぬ」陸奥守「此上は一先御屋敷へお歸りの上」兩人「又改めて」陸奥守「ア假令老中の差圖たりとも我意を達せず此儘に立歸らんや留守居共を呼べ」門番「ではムり升れと」陸奥守「詞を背くか」兩人「全く以て」陸奥守「呼へと申に」ト急度いふて袖を返すが木の頭」兩人「お留守居方〜」ト門をけはしく叩く摸樣宜しく淺黄幕を冠せ知らせに附き淺黄幕を切て落す

造物向ふ一面網代扉白の幕を張り上下柴垣櫻の立木同釣枝都て田村邸庭中の模様上の方に庄田下總守大久保權左衛門無地の着附麻上下の拵らへにて高相引にかゝり此左右に多門傳八郎磯田武太夫無地の着附麻上下の拵らへにて白鞘の刀を持ち介錯人にて扣へ真中に右京

太夫着附麻上下の拵らへにて平伏して居る時計の音にて道具納る 右京太夫「是は〜御上使を始めとして御檢使御介錯人の各々にはお役目御苦勞千萬早速御出迎ひ申べきの所何分俄の混雜に取紛れ失禮の段は幾重にも御高免の下さり升せう 下總「何様御混雜の段御尤千萬只今御自分様へ申聞け候通り内匠頭が罪輕からざるを依て庭上に於て切腹申付よとある則台命 權左衛門「上使は庄田下總守殿檢使は斯くいふ大久保權左衛門 武太夫「介錯人は磯田武太夫 權田村殿の義にムれば御如才のあるまじきなれ共 武「萬一龜忽等はあらば預り人たる貴殿は勿論我々まで役目の落度 下「萬事御心付けころ肝要にムるぞ 右「御懇切なるお心添へ上の命を承る某如何で龜忽のムり升せうや 三人「シテ内匠頭又は」ト後ろにて」内「アイヤ淺野内匠頭長矩御上使へお目通りの仕らん」ト真中の白幕を近習二人左右より絞り上る向ふの廣庭の遠見を見せる事淺野内匠頭前幕の着付にて警護の近習付添ひ出て來り」内「承れ」御上使には庄田下總守殿あるよし内匠頭故各々迄斯く御苦勞に預る段長矩謝すべき詞なしシテ御上意の趣きは 下「上意の趣内匠頭慎んで承はられよ 内「ハア、」ト下總守懷中より御書を取り出し」下「一今日淺野内匠頭義吉良上野介に意趣これあるよしにて殿中を憚ららず時節を辨へず刃傷に及び候段不届至極に思召され候是に因て切腹仰せ付らるゝ者なり 内「ハ、斯くあらんと存せし故疾より用意仕りし内匠頭〇シテ相手方上野介には 下「

左れば其義に付老中方にも評議まらくなりしかど上様御上意には吉良は公儀を大切に存じ、橋淺野切りかけたれども相手にならず其場を去りしは殿中を辨へし神妙の致し方、武手疵全快の上は役目元の通りとある則上、内仰せ渡され、内スリヤ上野介にお構ひはござらぬと、右内匠頭殿斯く迄の沙汰あらんとは存せざりしが上の嚴命貴殿の心中推し量られ御氣の毒に存じ升る、内貴殿の仰せ忝うは存ずる殿中といひ時節をも憚らず因て其責内匠頭一人に歸し切腹仰せ付られし條君恩忘れ難く存じ奉る、下切腹は未の刻との御詫を俄の義故何かに手間取り餘程の遅刻、武早く用意、三致されよ、右イザ内匠頭殿、内心得申た、右其方共には切腹の設けをば、近習ハア、「ト近習幕をあけて這入る」内御上使暫時御免下され、右イザ御案内の仕らん、「ト右京大夫内匠頭幕の内へ這入る橋掛より近習疊を持出て來り真中に直し此上に毛氈を敷き四隅に櫛の花を立て切水桶に水を入れ提げ出て來り能所へ直して平伏する下總守傳八郎も知らせる傳八郎最期の設けを見届ることなし有て下總守に是でよいと知らせる是にて下總守近習に傳へることなし近習正面に向ひ」近習イザ内匠頭殿設けのお席へ、「ト兩人幕を上げる内より内匠頭水上下の拵らへにて出て來り疊の上に住う橋掛り、右京大夫三寶に扇のをせ持出て來り内匠頭の前へ直し跡に下る」下イヤ何内匠頭殿申置れ度義もムらば上使庄田下總守承り申でムらう、内忝なうは存する此期に及び内匠頭申残す義はムらね共只願ひ度は今日上野介を討留めざるは刀の鈍き故など世人の譏りを受ん事死後の耻辱に候へは何卒拙者今日帶せし短刀を以て御介錯に預りたし、下其義は聊苦しからず、右ソレ内匠頭殿の御差料を是へ、〇ハア、「ト橋掛りより小さき刀を持出て來り右京大夫に渡し這入る」右内匠頭殿貴殿所望の御差料是に持參致してムるぞ、〇イザ御介錯人、「ト武大夫に渡す」内コハ右京大夫殿には不慮の義に付斯く御迷惑をかけ候段長矩お詫びの詞もムらぬ、右ア、イヤ内匠頭殿武士は相身互でムるか心置なく御最期をば、内忝う存じ申す、右夫に付ても先刻御上使へは願ひ置候御家來片岡源吾右衛門といへる者存命の内對面致し度との歎願長矩殿逢ふて遣はされよ、内何片岡源吾右衛門参りしと、下苦數ムらぬお通し下され、「ト右京大夫花道向ひ」右夫に扣へし片岡源吾右衛門御上使の御許し是へ、「ト向ふにて」源ハア、「ト源吾右衛門ツカ」と出て來る、内源吾右衛門か、源我君様、内よくぞ参つた、源ハア、「ト花道に平伏して」源所詮御對面は叶はぬ事と存せしに御當家様の御情といひ御上使の御仁恵に依り升て御存生中の御尊顔を拜し奉る段片岡源吾右衛門斯様な悦ばしい義はムり升せぬ、内テ、予も悦ばしいぞよ、〇去りながら先達より其方の異見聞入れぬにはわらね共止む事を得ぬ今日の仕合必らず短氣を主と思ふてくりやるな、源コハ勿体なき其か詞日外傳妻屋敷の無禮より

度重りし今日の手違ひ遺恨に遺恨の重なる上は決して君の御短慮ならず御尤もムり升る
 内「チ、予が心中推量のいたしてくりやれ 源「何か仰せ置るゝ義よても候は、源吾右衛門へ
 仰せ付られ下さり升せう 内「其義の只今上使にも心付け給はりしが申置くべき事更になし
 ○なれ共只恨むらくは上野介を討洩らせしが残念なと國家老内蔵之助へ「ト言うけるを」
 源「ア、イヤ我君跡々の義にお心残さず御最期清く御切腹の程願はしう存じ升る「トヒつと
 思入是を本釣かねに成り空より櫻の花を散らす」 下「今打時は最早暮六つ 權「イヤ内匠頭
 殿 武「御最期をば 源「スリヤ最早御切腹にムり升るか 内「チ、春の名残りの花諸共 有無
 常を示す入相の 源「鑑に散り行くお命も 右「下「今を一期の 皆々内匠頭殿 内「憚りながら
 硯短冊御無心申す 右「お差支なく用意は是に「ト有合ふ白木の硯箱に短冊を添て出す内匠
 頭短冊に歌を書き」 内「御上使御免○源吾右衛門近う 源「ハッ「ト舞臺へ來り平伏する」 内「
 是ぞ淺野内匠頭が最期に残す辞世の一首紀念と申て内蔵之助へ取らしてくりやれ「ト短冊
 を渡す」 源「スリヤ此お歌を大石殿へ 右「辞世の御歌承りたし源吾右衛門とやら吟じてく
 りやれ 源「ハッ○風さるふ花よりも又我は猶 内「春の名残をいかにとかせん○御介錯御苦
 勞に存する「ト扇を取て頂くを武太夫内匠頭の刀にて首を打落す」 下「適れ名刀 武「斯程の
 刀の頭へに望み不思議に命遁かれたる 權「誠に吉良は 右「奇代の 四人高運 源「願御無念

に「ト切首を取あげ膝に置くのが木の頭」 源「ムり升せう「ト口惜しきこゝろ下總守右京太
 夫は顔見合せ顔をろむける武太夫は白刃に手水桶の水をかける此模様よろしく合方にて返
 し
 造物平舞臺見付五七の桐の紋散らしの金襴上下打廻し家体是も同しく紋散らしの金襴橋掛
 り杉戸奥殿の模様銀燭臺を燈し爰に花町襦奥方の拵らへにて手をつかへ後ろに腰元四人付
 添居る陸奥守氣のせくこなし此見得早めの相方にて道具納る 花町「是のく御本家様には
 俄のお入り上下混雜の今日にムり升ればお出迎も致し升せず失禮の段御免下さり升せう
 陸「イヤく某とても忍びにて罷越せしといひ一家一門の伊達田村其斟酌には及ばぬ事
 テ右京太夫殿には 花「我夫には先刻より内匠頭殿御切腹の義に付升て御上使様へ御面談を
 願、實は身も其義に付て参りし所老中よりの差圖と有て出入りを許るさぬ門戸の堅め因て
 只今留守居共に掛合斯く打通つて参りしも火急に面談致したさ 花「何の御用は存じ升せぬ
 迄一應夫々へ申聞けるでムり升せう○ソレ腰元共 陸「早くく 花「元「畏り升た「ト奥へ
 這入る」 花「誰ぞおらぬかお客様へお茶お葎盆を 近習「ハア、「ト橋掛り袴羽織の近習二
 人書院葎盆服紗に茶碗を載せ出て來る陸奥守は始終心のせくこなしにて」 右「何陸奥守
 殿御入來となか目通りの仕らん「ト奥より右京太夫出て來り」 右「是のく綱村殿には能く

こそ御來駕 陸右京殿今日の珍事に付お心遣ひの程お察し申す 右「シテ御用事は 陸外でもムらぬ今日殿中松の間にて刃傷に及びし内匠頭其罪かるゝらすと有て當家に於て切腹仰せ付られしは我一門の幸ひにて武士の情は今此時聊思ふ所存もあれは暫らく猶豫を願はんと早馬にて参りし某シテ内匠頭には 右「只今切腹仕り死骸は淺野大學殿へ引渡し申てムる 陸「何スリヤ最早切腹せしとぞ ○ハア、左もなき内とせきにせきしも今日殿中の評議を聞くに老中一同神君の掟を守つて両成敗に行ふといひしを小身より經上りし柳澤美濃守御傍にあつて是を取り消し内匠頭一人も死を賜りしは公けならず陸奥守知行に替へても諸侯をかたらひ歎願なさんと思ひしは斯く手おくれに相成りしは殘念至極シテ切腹の式は如何取計らはれしぞ 右「去れば庭上にての切腹こそ相當たるべしと有て池の汀に緋毛氈を敷き扇腹仕つてムり升る 陸「スリヤ假小家もしつらはす一城の主をば平士同様 右「如何にも目附の差圖に任うして「ト陸奥守むつとしたこなしにて」 陸「右京太夫殿御身の父隠岐守殿には我父の舍弟にて御邊と我の從弟同士なり左すれば知り給はんが伊達と淺野は先祖より不和なる中然るに今日内匠頭當家に於て切腹仰せ付られし事なれば如何なる取計らひ致さんかと世人の噂さまちくたるへしよし假令目附の差圖にもせよ武士の情を思ひなば一應申さだむべきに庭上にての切腹とは兩家不快の中なる故其鬱憤を散せん爲斯く情けなく計ら

ひしかと諸侯の譏りを受けん事耻かしく明日より陸奥守何面目に出仕登城が致されうか左様な無分別者との思ひさりしに伊達一家の武士道は貴殿故に捨つてムるわい 花「其お怒りは御尤ではムり升れど今日の義に付升ては皆御目付よりのお差圖をれば 陸「夫が不仁の至りと申もの情を思へは家に替へても目附の差圖に應すべきや 花「サア夫には何か我夫に御思案あつてか打解てのお咄しが御一家中ではムり升せぬか 陸「其一家も今日限り 花「サア左様でもムり升せうがマアおぬるくとも御茶一つお心鎮めて下さり升せ「ト茶碗を差出す」 陸「エ、當家のもてなし所望にはムらぬわい「ト茶碗を叩き落し向ふへツカ〜と這入る此内右京太夫後悔のこなし」 花「モン我夫マいつにない御本家様の御立腹両家義絶の端どもならば御先祖様への御不孝なり且は世間の思惑も面伏せなる今日の仕宜綱村様のお怒りを申さだむる御思案はムり升せぬか 右「思案といふて外にかい綱村殿の立腹も無理ならざる武門の誠 花「そんなら今日の切腹は 右「右京太夫が一生の不覺 花「エ、 右「誤つた事「ト手を膝に置のが木の頭」 右「致したわい「ト當惑の思入花町は氣をもむこなし此模様宜しくさだみにて幕

五幕目 萱野速水両士早打の場

役名

- 二 萱野三平
- 一 速水藤右衛門
- 一 萱野七郎右衛門
- 一 百姓大勢
- 一 萱野和助
- 一 迎僧二人
- 一 娘お民
- 一 婆々一人

造物松並木の道具幕明く「ト驛路入り馬士頃にて向ふより百姓大勢着附羽織形りよて中に
 婆々一人交り銘々珠敷を持ち出て来り ○何と皆の衆萱野様のお家もお氣の毒な事ではな
 いかいのう 皆々本にろうじやてさうして葬禮は何時じやの ○「サア正午の刻といふのじ
 やからモウ道迄出たで有うぞい △夫では急がうではあるまいか □「ろんなら皆の衆 皆々
 サアく行き升せうく」ト皆々舞臺へ来り道具幕の前を上手へ這入る知らせに付道具幕
 を切て落す

造物向ふ在方を見たる野面の遠見空より松の釣枝都て攝州萱野村の体爰に下手の方に葬禮
 の駕を置き袈裟衣の坊主二人饒鉢を持ち以前の百姓大勢立かゝり居る葬禮の鳴物にて道具
 納る 坊主「コレく皆の衆や向ふから馬が来る片寄らつしやれく」×「成程らう走つて
 皆々来かるはく」ト上手より萱野三平速水藤右衛門熨斗目麻袴白木綿の後鉢巻せし拵ら
 へにて兩人馬に乗り鞭打て走り出て来り兩人身体勞れしこなしにて」藤右衛門如何に萱野

氏一昨日殿中にての凶事を聞き大下馬先より其儘晝夜をかけし本國への早打嚙そこ元にも
 勞れしならん當所萱野村は御邊の故郷と承れば親父の家に立寄て暫時休息致されよ某一人
 駈抜け申さん 三平「コハ藤右衛門殿の御詞とも覺へず主家存亡の秋に望み假令故郷なれば
 とて私に隙取らんや續かれよ速水氏 藤流石は萱野三平殿主君の爲に家を忘るゝ貴殿の誠
 忠驚入つた」ト皆々三平を見て「○「サ、こなさんは三平殿 皆々」よう戻つてムつたのう三
 ナ、さういはるゝは村の人々 △「モシ七郎右衛門様息子どんが戻らしやつた 皆々」七郎右
 衛門様く「ト橋掛りより七郎右衛門胡麻盤かづら白無垢の着付上下白紙にて柄を巻さし
 大小編笠を冠り和助同し拵らへお民水髪の島田片化粧白無垢振り袖の拵らへにて走り出て
 来り」七郎「サ、ろちは三平 和助兄者人 民」よう戻つて下さんしたなア 三「見れば親人始
 めとして何れも喪服を着用せしは親類にても不幸があつてか 七郎「イヤくこりや女房め
 が葬禮じやわい 三「何母人の葬禮とぞ 和」サア此正月御病氣との知らせを聞き殿様へお隙
 を願ひ歸村せしより晝夜お傍にかしづき參らせ種々手を盡せしなれど 民「其甲斐もあうさ
 のふ日暮よ果敢なくお成り被成れ升たわいなア 三「スロヤ御養生の叶はずしてよみじの客
 とおられしか ○ホイ 七郎「サア其死に際迄そちに一目逢ひたいと言ひ死を仕おつた故妻を
 送る筈はなけれども色を着たは三平我身の名代野送りに計らすろちの顔見たは噂めが導さ

で有うぞい □三平殿無御愁傷で 皆々ムらうのう 藤萱野氏母御の死去とあるからは此儘直にも行かれまじ某先へ参るでムれば貴殿は跡より馳られよ御心中お察し申と○ハイロウ「ト馬に鞭打ち向ふへ這入る三平恠りかし」三「親人御免」ト手綱を取直すをお民恠りして前へ立ち塞がり」民「ア、イヤ三平様母御様の御病死を聞つゝ何所へ行かしやんすぞいなア 三「何所へ行うぞ三平が今日當所通行は私の義にあらず主人内匠頭様一昨日殿中にて吉良上野介へ亦傷よ及ばせ給ひ相手は手負ひし計りなれども場所柄といひ上使へ儀式の日なれば御切腹は必定と急を告る國への早打 七郎「エ、スリヤ殿様には 皆々殿中にて 三如何なればこそ萱野三平お家の大事に愁ひを抱き心中やるかたなき折柄母の身まがり給ひしとはよくく運に盡たる某忠孝全く仕難き今日右の仕宜故御免下され」トツカくど花道へ行く」和「ア、イヤ兄者人お心せきも御尤なれども一人の母の死なれし折柄 民「一寸なりともお内へ立寄りせめて手向の水一つ 三「ヤア禹王は洪水を納め給ふに七ヶ年の内我門戸を三度過ぎさせ給へども立寄りざるは臣下の鑑我は禹王にあらねども私の恩愛に公事を怠り申べきや 七郎「そんなら母の葬式を 皆々見捨て此儘 三「いづれも御回向お願ひ申」ト思ひ切たるこなしにて馬に鞭打」三「ハイヨウ」ト馬を飛ばして向ふへ這入る」和「親人 民「伯父さん ○「ひよんな事に 皆々成り升たなア」ト七郎右衛門氣抜けのしたるこなしに

て手に持ちし珠數を取落す和助是を取上げ」和助「モン」ト手に持たす七郎右衛門心付き珠數を取直すのが木の頭」七郎「南無阿彌陀佛」ト珠數をつまぐる和助お民はひとつと泣く皆々氣の毒なるこなし此模様宜しく馬士唄にて拍子幕

六幕目

矢頭長助住家の場
赤穂城中評定の場
同太鼓矢倉の場

役名

- | | |
|----------|---------|
| 一大石内藏之助 | 一岡野金右衛門 |
| 一寺阪吉右衛門 | 一武林只七 |
| 一矢頭右衛門七 | 一大野軍右衛門 |
| 一全長助 | 一長助娘於君 |
| 一片岡源吾右衛門 | 一醫師正宅 |
| 一大石主税 | 一金貸芳兵衛 |
| 一速水藤右衛門 | 一青物屋萬作 |
| 一磯貝十郎左衛門 | 一諸士惣出 |
| 一大野九郎兵衛 | 竹本連中 |

造物常足の二重見附石摺の襖上手折廻りの障子家体下手屋敷癖いつもの所縁子張りの門是に矢頭長助と記せし表札都て赤穂城下矢頭長助屋敷の体爰に芳兵衛金貸の拵へ萬作青物屋の拵へ正宅坊主かづら齋師の拵へにて詰かけ居る於君島田かづら留袖肩入の着付屋敷娘の拵へにて詫て居る此見得合方にて幕明く 三「サアどうまで下さるのじや〜」 於君仰せは一々御尤ではムり升れを御存じの通り昨年より父の大病夫故ツイ御不沙汰には成り升たれと何れ其内如何やうとも 正「コレ〜」娘御其言譯けは受け升まいサアなせといつしやれ殿様には江戸表であらい短氣な事を仕出かされ其日の内に腹を召した計りか御領地迄も召上られ城も翌日中明渡せと有る御上使が乗り込んで來たからは否でも應でも明渡さずは成り升まい 芳兵衛夫に付て日外のら御家中方の評議を聞けは城を枕に討死をさつしやるとやら夫は御武家の職分故どうとも勝手にさつしやれたが只迷惑をはか下の町人は是迄通用をさしてムつた札は皆反古じやがな 万作其損金が大體な事ではムらぬ御領分一同が皆難澁其上掛け迄踏まれてはお前方よりこちらが乞食に成らぬは成らぬ 芳第一詰らぬ者は此芳兵衛今年の知行を引當に貸て進せ九十兩の金勿論秋の約束故まだ催促する時は來ねども殿様がのういふ譯では見込がないじや所でけふはどうあつても 三「算用して貰らはねば成り升せぬのじや 君サア夫は其筈でもムり升れを只さへ御大病の其上にお家の騒動を

聞てより何かと御苦勞遊ばす父上若しも是が聞へたら病のさはりに成り升れば 正「イヤ病氣にさはらうともわしらが仕出かしたといふ事ではなし家中は勿論お下たの者の難義も構はず亦傷に及ばしやつた殿様は悉皆氣違ひ乱心者じや 君其家來のこなたの親御は去年から病氣にて腰が抜けてムらつしやるゆへ城へ籠るといふ様な侍らしい事なつしやるまいが油斷がならぬ夜抜けでもせぬ内に 万「白地を付ねは 三「成り升せぬのじや 君左様でもムり升せうが夫を父に聞かし升ては 芳「エ、遠慮して居る様な 三「時節ではないわいの〔ト於君を突廻け行うとする奥より右衛門七若衆かづら着流しの拵らへにてツカ〜と出て來り正宅を突廻して目潰しをくはし芳兵衛萬作を取て投る〕君ヤそなたは弟右衛門七「モシ〔ト押へる〕 三「サア痛いぞ〜 正「ゑらい手の利く〔ト起上り右衛門七を見て〕 芳「ヤろんなら今 三「投げたのは 有「矢頭長助が悴右衛門七でムる 正「何じや右衛門七でムる〇モないものじや何で長袖の醫者始め 三「投げたのじや 有「投げたは愚か手討にしても苦しうないわい 万「コレ物を借た恩人を何で手討にしても 三「苦しうないのじや 有「チ、只今聞けは主君を狂氣乱心者と辱しめ父を腰抜武士とは聞捨ならぬ今の悪口假令知行に離るるとも借用の返済を怠り夜逃致す者と思ふう父への無禮は兎も角も君辱しめらるゝ時は臣死すの本文今汝等を手討になし切腹致す矢頭右衛門七 正「コレ〜」息子殿いかに年か行ぬ

はとて堪らへじやうのない短氣者何も今受取らうではあいわいの 考お上みがかういふし
 ぎ故に念の爲來升たが 丑「戻してさへ下さつたならこちらは何にも 三人「いやせんがさ 丑
 假令殉死を致せばとて君の汚名を殘さんや今明日の其内には武具馬具を賣拂ふとも 芳返
 濟するといはつしやるか夫さへ聞は夫で安心サア先生早うお立被成升せ」ト芳兵衛兩人を
 連れて門口へ出て」 考「モン先生公儀の人数にさへ敵對はうといふ程の死にあればどの様
 ち事を仕おらうも知れ升せぬぞ 正「サア夫故爰迄逃ては出たれど命も惜いが金も惜い 丑
 餘もや今いふたお詞に 右「部家住ながら矢頭右衛門七武士に二言はムらぬわい 正「夫さへ
 聞たら夫でよいせんから二人の衆 二人「正宅様 三人「皆血眼に成つてけつかるわい」ト三人
 這入る跡床の淨るりに成る」 淨るり「跡に二人は兎や角と思案に胸を押鎮め於君は弟よ打向
 ひ 君若しも父上に聞へたなら又御苦勞を遊ばさうかと案して居たによう來てたもつたの
 う 右「是と云ふも昨年より父上様の御大病一ト日も早う御全快をと加持祈禱から良薬の價
 も厭はず借財して手に手い盡せど玄るしなくいは、僅かの金子にて雑言聞くも口惜しけれ
 どお上みが斯くの仕合故町人共の立腹も尤〇チ、勝手へ薬をかけて置しが煎じ詰りは致す
 まいか 君「お薬ならわしが見て來やうわいのうしたかげふか翌の内にと今更なながいやつ
 たなれど今の手元でどうマア夫が 右「ハテ夫も些細な金子にムればどうか成るでムり升せ

う決して御案じ下さり升るな 君「サア案じまいとは日毎に重る父の御病氣〇ア、如何に成
 行く事じやぞいのう 丑「と打まはれ勝手へころは立て行折から一間に苦痛の聲 右「チ、父
 上又お差込みでムり升るか 丑「明ける一間の病所には父長助がたつての苦しみ」ト右衛門
 七障子を明ける内に布團の上に長助長髪かづら肩入の着付病人の拵らへにて苦痛のこなし
 後ろに六枚屏風置あり」 右「ちとおさすり申升せうか 丑「と立つを長助押留め 長助「イヤ
 く忤搦ふてくれな病ひに死するは武士たる者の本意にあらねどそちは未だ部家住なり我
 は腰膝立されは評定の席へも叶はずせめて是で死んだなら諸士に先立つ死出の御供必ず手
 を付ける事相成らぬぞ 丑「といふ聲さへも肩息の父が病苦を慰めんと 右「コハ父上お骸に
 手を付けるなどは子に看病を怠たらせ不孝の者になし給ふか 長「たはけ者め父への孝は御
 家静謐の時の事今日君家存亡の秋に際し君への忠を跡に致すは武士たる者の順道ならず所
 詮我は武運拙なく塵の上の往生と覺悟極めし此業病今にも落命致せば死骸は野に捨鳥獸の
 餌食となすとも父母兄弟家をも身をも打忘れ偏に亡君の御爲に父に代つて御奉公仕るが我
 への孝と心得よ御家中多き其中にも取分け御恩を蒙る長助此一言を忘るゝなよ 丑「道を解
 きたる爺親が詞に右衛門七涙を流し 右「ハ、ア有難き御教訓いかで忘却仕らんや去なら
 御大病とは申せども常の御氣質にも似合はぬお詞片時も早く御全快の遊はされ右衛門七俱

々力をば盡さうとはなせかつしやつては下さり升せぬぞ 長「イヤ、我はモウ叶はぬ有
 えれば病に負てのお氣弱お心屈する時節ではム升せぬ 長「病に弱る爺親の氣を引立し其所
 へ内藏之助の使金右衛門宙を駈つて馳來り「ト向ふ岡野金右衛門着付麻上下國侍の拵へ
 にて走り出て來り」 金右衛門「右衛門七殿在宅召さるか御家老より御家中一統への御配分金
 長助殿へ御渡し下され 長「金投込んで行んとす長助夫と聞よりも 長「ア、イヤ金右衛門殿
 お金分配とは如何なる譯ぞういふ評議の治りにて 金「其事も申たけれど評議一決致せし今
 日心もせけは御免下され 長「又も行くべき有様に長助一間をいさり出 長「ア、イヤお心せ
 きでもムらうなれど日々待し評議の一決斯く病みはうけたる矢頭長助御役には立つまいな
 れど我も淺野内匠頭が家臣のはしくれ失禮ながらお待下され 長「と呼び留られて行くにも
 行かれず 金「何様病氣重体の長助殿なれば評議の席へも叶はず會議の決定お待兼も御尤 長「
 といひつゝ内にツ、と入り 金「今日の大評議にて粗一決致せし様子御聞下され○抑先達て
 速水藤右衛門萱野三平江戸表の急變を告げ來り國の騒動一ト方ならず二の手の早打原惣右
 衛門大石瀨左衛門より主君御生害の様子をは聞と齊しく本城に集り日々に評議致せども臆
 病第一の大野九郎兵衛兎角拒んで一決せず御家老大石内藏之助殿には君辱しめに逢ふ時は
 臣死すの古言を守り假令領地は召上げらるゝとも上使を引受け花々しく城を枕に討死と御

覺悟を仕給ひし鉄心更に變らねども大野が心底左にあらねば夫に隨ふ番頭小山伊藤玉村な
 んど臆病風に引立られ御舍弟大學殿も御坐あれば主君のお家系を失なはず家中離散を致さ
 ぬ様一先づお目附衆迄愁訴なさんと多川月岡の兩人を江戸表へ遣はされしかど早上使には
 彼地をば出立なしてお目附諸共既に今日到着仕たれば最早其事相叶はず彌々討死と只今血
 判眞ッ最中右に付て御國の銀札此儘捨置なは反古と相成り領内一圓人民の難義と大石殿の
 計らひにて札坐に於て正金と引替へまつた御用金八萬兩をもつて家中一同へ配分仰付られ
 し所討死の評議には尻込み致す大野なれ共斯様な節は一と立知行高と申せしと大石氏の
 論破によつて甲乙なしの配分金イヤお納め被成れ長助殿 長「評議の様子一々に聞く長助は
 涙を浮め 長「誠に大石殿には武士の中なる誠の武士倅右衛門七評議の様子承りしか 有「ス
 リヤ御家老始め城を枕に討死と御評議一決致せしと 金「大野如きはイヤ知らず亡君の御
 遺言あらずして如何で城を明渡さんや長助殿是今生のお別れなり右衛門七殿御病氣大切に
 致されよ 長「詞半分いひ殘ま城中さして馳歸る長助立ぬ腰を上げ出行く跡を見送りく
 長「エ、口惜しいわい、忠義を存する方々には皆討死と血判迄致されしとある其中に病
 の爲とはいひながら誓紙に洩れて配當の金子計りを頂戴なす此長助が心の苦しき足腰立ぬ
 業病は如何成る罪の報ひなるか○アイマ、、、 有「其御残念は御尤にはムり升れと左様に

御心惱ます程猶更重る病の障り○姉上お薬を早う〜 呼び立聲に姉於君薬拵らへ走り出 君「ナ、又お差込みでムリ升るかいなア○サア父上此薬をお上り被成て下さり升せ 湯」と茶碗出す手を押へといめ 長「イヤ娘今服薬を致せば逆何の甲斐ある我命○水をたもれ〜 君「デモお骸に水はお毒でムリ升 長「エ、水一口たもれと申に 湯「いふも苦痛の父が有様 右「イヤ〜 姉者人最前とは御氣色も餘程悪うムリ升れば御病人の仰せ次第に 君「そんなら最前の御符をば御頂かせ申升せう 右「其土瓶の水成りとも 君「ナ、合点じやわいのう 湯「是が末期の水ぞとも知らぬお君が汲で出し 君「モシ父上水は是にムリ升ちやつとお上り被成升せいなア 湯「持たす茶碗もふるふ手に 長「忝ない〜 親なればこそ子なればこそ昨年よりの父が看病手に手を尽せし薬の代に衣類調度も賣拂ひ先代より借財とては塵一筋もあらざりしに娘に迄も町人に両手をさげ詫さすも皆親故思へは御恩の我君の御役に立す子に苦をかける親は此世の捨り者免してくれよ娘右衛門七 右「ア、イヤ父上其義お耳に入る時は嘸御苦勞もあらんかと姉上と申合せお隠し申置たれども高の知れたる借財金幸ひ只今御家老より下し給はる配分金はを以て償ひ升れば必ず共にお心にかげられ升せずと 長「コリヤ忤何を申す武士たる者の討死に肌付の金子を所持せずしては死後の恥辱此上なし大石殿の思召も必定夫等の事からん其金子は其方の肌につて早く行け 右「行けとは何れ

へ参り升る 長「父に代つて御奉公をは 右「スリヤ諸士諸共籠城をは 長「子に死ねといふ親の心を推量の致してくれ 右「其義は仰せあらす共君家の御爲一命を捨るは元より覺悟なれ共御病氣の父上をは跡に残して何とマア 長「エ、未練者めが○アイタ、、、 君「ナ、お差込みが参り升たかお氣を静めて一口お上り遊ばし升せいなア 湯「いたはりながら手を持添香ます茶碗の水一滴ト長助引息に成りばつたり俯向けに成る」 君「モシ父上どうぞ遊ばし升たか 右「又お瘰氣でムリ升るか決してあまたのお詞を背くよはムリ升せねと御大病の父上といひ跡には女の姉一人残して最期を遂ん事跡々が氣遣はしくお詞返せし此右衛門七お肝を立て下さり升るなお差込みはいつもの所でムリ升るか 湯「と引起し父親の水浴より撫下げ押下げト胸先を撫で手に付し血汐を見て」 右「ヤ合点の行ぬ此血汐は 君「何血汐とは 湯「兄弟寄つて訝かしながら父の肌着をくつるぐれば朱に染たる覺悟の切腹 右「ヤコリヤ父上には 君「お腹をお召被成たかいなア○父上様いなア 右「親人コリヤ何故の御生害でムリ升る此腹帯迄おされまは所詮言甲斐ない右衛門七と見限りての御覺悟でムリ升るか○姉者人 君「弟 二人「ハア、 湯「ハツと計りに取付し死骸撫つさすりつ兄弟がいたはる甲斐も涙にくれ前後正体なかりしが右衛門七思はず手にさはる一通取り出し 右「何右衛門七へ申残す書置の事 君「そんならそなたへの書置を御所持被成ていあつたか早う讀でたもひのう 湯「

せり立つ姉より右衛門七が心せある、手紙の様子何事ならんと封押切り讀下したる其文意
 有「我家は梶原平三景時の末葉にて先君御在世の砌り我父長右衛門を召され梶原の氏は
 聞へ宜敷からずとあつて家の定紋矢筈に因み矢頭と下し給はるのみか亡君内匠頭様御出生
 の砌り所々の山伏に占なはせし所御武運目出度渡らせ給へと毒害のさはり有之に附き御愼
 みあるべしとの告なり其頃我等十歳の幼年成りしが上み御用心のお相伴として朝夕の御膳
 部御前に於て内匠頭様同様に頂戴致し片時も御傍を離るゝ事なく既に昨年御出府の節御供
 仕るべきの所病氣に依て相叶はず然るに今般江戸表の凶事痛と思ふ所なり我年來の御高恩
 に報はんと欲すれども病の爲めに行歩叶はず心中可察入候就ては大石内藏之助殿平素忠臣
 無二の仁に候得は臣たるの道を尽し殉死の思召も可有之と存候に付其方事未だ部屋住にて
 御家來ならずといへ共父の養ひを受け候限りは御家來に相違無之候間何事も内藏之助様御
 差圖に隨ひ父の志しを達し候を以て孝行第一と心得べく候然れども若年の其方萬一未練の
 振舞有之候ては亡君の御耻辱且先君相改め候苗字の穢れに候間心残り無之様切腹相遂け冥
 土の魁け致し候返すべくも父の遺命背くに於ては生々世々勘當たるべく候なり 有「讀みも
 終らず右衛門七は涙に文字も分り兼 有「スリヤ私に不忠の心も出んかど心を勵ます其爲に
 御切腹遂げさせ給ひしか 有「かういふ事と知るなればお水を上げはせまいもの 有「藥に代

へし一滴の水が末期のお別れとは 有「いかに弟右衛門七へ御教訓の爲じやとて 有「思ひ切
 たる御身の覺悟 有「必ず共に父上の 有「御遺言は骨髓に染み通りたる矢頭右衛門七 有「せ
 めてお息の有る内なら 有「御安心もさせんもの 有「今は甲斐なき亡き魂の 有「家の棟離れ
 ずましますば○御安堵被成れて「ト兩人死骸を抱き起し」 有「下さり升せ 有「尽ぬ涙に「ト
 於君は死骸に取付き泣落す右衛門七は涙を押へる此模様宜敷三重にて返し
 造物平舞臺通り丸に鷹の羽の紋散らしの金襖橋掛り戸家口共同じく金襖舞臺薄縁を敷き
 爰に大野九郎兵衛胡麻盃かづら熨斗目麻上下忰軍右衛門同じ拵へ上下に速水藤右衛門襷貝
 十郎左衛門岡野金右衛門武林只七矢張熨斗目麻上下の拵へにて刀を突立懸り居る早い合方
 にて道具納る 藤右衛門「サア大野氏失禮ながら我々先へ血判致た 十郎左衛門「此上はうこ許御
 親子早く血判 四人「致されよ 九郎兵衛「アイヤ方々手前今日登城なせしは替紙血判の事では
 ない兼々内藏之助殿へ談じ置し配分金の事 軍右衛門「知行高に割らるゝ様と父より申置れし
 に人数に應じて割られしは其所爲一圓合点が參らず但し大石殿には同席たる父を差置一存
 に別かれても夫でよいものであるか 金右衛門「スリヤ大野殿の御出席の其義に付ての事で
 るか何様籠城討死と申時には毎度尻込み致されしに 只今今日に限りいちちは立て出席あ
 りしは割賦金のお調らべか此義に付ては大石殿思召あつての事 九「其思惑とはいかない事

夫承はらう。藤「左れは大石殿の思召といふと大身小身といへども君に仕ふるに隔てなく其上大身には武具馬具家財破却なしても二年三年の飢寒は防ぎ申でムらう。十郎「夫に引替へ小身者は刀脇差の餘計もなく無かし難義の者あらんと人数に應じて割賦ありしは已れを利せざる大石殿の。四人「至當のお捌き。九「サ、夫が大石殿の了簡違ひ小身者には家用も少く大身にいたつては召使も數多あり殊に此大野などは。金「アイヤ御家老主君を失ひ知行に離れ最早家來を召使ふにも及び升まい。只「殊に彼配分金は妻子の飢寒を凌ぐの手當今日城に精籠り討手を引受け討死致すに金銀財寶何に致さう。金「夫共貴殿御親子には臆病に引立られ。只「逃仕度でも。四人「召さるゝの。軍「ヤア無禮な一言不肖なれども當家の執權大野九郎兵衛並に倅軍右衛門左様を武士と思ひ居るか。十郎「然らと評議の席へムつて早く血判。四人「致されよ。九「イヤ其血判は致すまい先達て多川月岡の兩人を江戸表へ遣はせしに未だ愁訴の返事も分らず死にはやるは猪武者と申者。藤「スリヤ御上使と入違ひ最早益なき愁訴の返事を。十郎「貴殿は待たるゝ。四人「御所存なるう。「ト向ふより麻上下の侍一人旅状箱を持ち走り出來り。〇「ハッ御家老へ申上る先達て江戸表へ立越へられし多川月岡の御両所只今早馬にて立歸られ何分にも身体勞れ居り升れは御口上は跡での事先づ御親類戸田米女正様よりの御狀大石内藏之助殿へ差上くれよとの義にムり升れは取敢ず持參仕つてムり升る。

九「何御親類戸田殿よりの御狀とな夫待兼た是へ持て。「ト侍つかくど舞臺へ來り状箱を九郎兵衛に渡す。藤「采女正様よりの御狀とムれは。十郎「此段御家老。四人「内藏之助殿へ。「ト奥にて。内藏之助「アイヤ各々お越しに及ばぬ大石内藏之助夫へ參つて拜見致さう。皆々「ハア。「ト後ろの襖を引抜く向ふ千疊敷の遠見に成り内藏之助其外惣出の諸士いづれも麻上下の拵へにて出て來り。内「是はく大野氏御親子には昨日御急病の由にて御出席もなくお察申す何が只今月岡多川が立歸られ。内「イヤ其義は只今承りしが誠に此度の災ひ實に路頭に迷ふ我々は是が平和の日にムれは中々斯る評議席で各々方の御心腹を承らん杯と申大役の勤まるべき身にはムらねども是非とも着けよとある何れものすゝめに随ひ席は穢せど元より其うつはにあらねば惡敷所は幾重にもお差圖願ひ奉る。〇何はしかれ戸田殿よりの御書面大野氏御披見下され。九「イヤく貴殿へ渡せとあるお口上おれは先づお手前様より。内「暫く御免下され。「ト状箱を受取手紙を出し封を切り讀取るこおし有て。内「采女正殿より斯様な義をば。「ト九郎兵衛の前へ遣る九郎兵衛眼鏡を懸け手紙を口の内に讀む事あつて。九「成程こりや斯うありさうな事じや。内「イヤ何速水藤右衛門殿評議も家中過半決心の致されし所只今多川月岡の兩人立歸つて彼の愁訴の職に付御親類戸田采女正殿より御書到來

是に付ていづれもの又思召もムらうなれハ御苦勞ながら一統へ御聞せ下され「ト手紙を前へ遣る藤右衛門受取り」藤「何れも皆々ハア、藤「一多川九左衛門月岡治右衛門両使を以て書付を差越され候紙面の趣家中無骨の至りに候内匠頭公儀を重し勤仕致され候段は各々存じの事に候故に内匠頭へ家中奉公の筋を思は、速に其地を引拂はれ滞なく城を相渡され候段公儀を重し奉る内匠頭日頃の存念にも相叶ふべきあり申に及はず候得とも公儀より差圖の通り相守られ早速穩便に立退かれ候儀肝要に候右の趣き家中の面々承知納得有るべきものあり四月五日淺野内匠頭家老中番頭中用人中目付中〇戸田采女正判「ト一同へ見せる」内「如何に何れも采女正様思召は斯くの通り各々思ふ所あらは申立られよ」十郎「ハッ我々共に於ては大石殿御意見次第」只「武士道さへ」皆々「相立弁れハ」内「外に存意のムらぬハ皆々ハア、内「シテ大野氏には」九「手前は先達てより申通り未だ御舍弟大學殿の御所置も分らざるに城受取りの上使に敵對致せば御家が立申か元より公儀に恨みもなく亡君の御心に叶はぬ事は戸田殿の御書面にて分つた事」馬「兎角御家の名跡をたやさぬが誠の忠義」九「只大學殿の安否をは聞定めた其上にて又如何やうとも致さうではムらぬハ」内「成程某とても大學殿の御出世を相待度は存すれども既に今日上使着致せしからは明日は城明け渡さねは相成らず元より公儀に恨みは毛頭候らはねども君御在勤中預け守らせ給ふ當城然る

に主人の證書もなく城明渡す其時は女童の守るも同然此度の義なればこそ戸田殿も斯様に仰せ越さるれ共是か亂國の世にムらは主君より預り守る持城を一戦にも及ばずして敵の爲に乗取られんや別して當城之先君御國替の初自費を以て築き給ひし赤穂居城假令鈞命を受けたりとて主人の墨付なき時は城を渡さる事武門の先習も是あるに無氣に城を渡さん事口惜しくはムらぬハ拙者に於ては臆病の輩を一人も残らず一廓に追込め飽迄武勇を震ひし後城中一時火を放ち不臣の輩を焼殺せし上心靜に切腹致す拙者が心底」九「軍」エ、「ト胸りなす内藏之助諸士に目を付け居る事あつて」内「是が武士の習ひにムれど左すれば御舍弟大學殿の御爲宜しからずとあの大学殿の御意見といひ戸田殿の仰せもムれば籠城の儀は止まり申さん」金「すりや御家老には當城をは」只「明渡さるハ」皆々「御所存よハ」内「息ある内は内藏之助いつかな城は渡すまじ某に於ては明日上使の登城を待受け腹かき切て主君の御供殉死は天下の法度なれども大學殿の科又は成るまじ我に組する輩は城を去らず切腹あれ又死を恐るハ人々は血判抜てお渡し申さん殉死不承知とぞなれてムる」ト急度いふ」十郎「ア、イヤ御家老いづれの道にも君恩報じ奉る我々共」藤「城中にての殉死とムれば城を枕に討死同然」金「殉死一統」皆々「御同意でムる」内「流石は忠義に厚き方々嘸亡君も泉下にて御満足に思召れん取分け大野九郎兵衛殿に御家にては譜代の大身御親子方には如何被

成るな「ト九郎兵衛軍右衛門もじく仕ながら」九「いかにも殉死 阿「承知でムる 只然らば誓紙へ 皆々御血判 九「いかにも承知は承知でムれども内藏之助殿御聞下され何が上島彌助の小兒疱瘡にて九死一生某に人參をくれよと申越せしを此寄合に心せかれ夫をばハタト失念の仕つた朋友の好身急難を救ひたし又軍右衛門が悴も疱瘡と相見へ昨日より發せし大熱ノウ軍右衛門けしからぬ熱でない 軍「ム、成程左様くあれが疱瘡にてもある時は血をわやなす事致し難し一先屋敷へ立歸り疱瘡にてムとすば直に又登城して血判を致すとも遅き事もムるまいサ片時も早く屋敷へ 九「いかにも左様致すであらう 金「アイヤ御両所御待被成れ毎度貴殿御親子方故評議一決仕らず 只「今日とても病に托し 藤「此場を去らんと召るゝは 十郎、必定別義あるに疑ひなし 金「夫聞迄は此坐の立さぬ 只「御親子席に皆々御付被成れ 内「ア、イヤ方々病人の事は是非に及はず大野氏には御下城有つて小兒の介抱致されよ 軍「然らば父上 九「いづれも退坐御免下され「ト軍右衛門付添花道へ行き思ひ出したるこなしあつて 九「ア、イヤ内藏之助殿申事を失念の致した前刻の割賦金はあれ切りでムるか 内「貴殿は金が望みでムるか 九「イヤ何別に望みは致さぬども 軍「悴が疱瘡なれば物入りもムれば 内「金子お手づかへの儀にムれば血判の節御相談をば 軍「イヤ何左様に仰せ下さらいで 九「然しまだ軍右衛門の分は頂戴の仕らぬぞ 金「夫の先刻そこ許へ

お手渡しの致してムる 九「アハ、ハ、左様であつたイヤモウ年寄ると物忘れを致してならぬサ悴 軍「父上 九「馬鹿なやつらだ「ト兩人向ふへ這入る上手より大石主税若衆かづら振袖麻上下の拵らへおつ取り刀にて出て花道へ行くを 内「コリヤ其方は主税でないか屹相して何れへ參る 主「ハテ知れた事不忠極る大野父子節義を思ふ人々の心をくじき既に一決致したる籠城の事破約と成りしも全く彼が臆病故大野父子を討殺し殉死の血祭り仕らん 内「大野如き小人を頼みと思ふかたわけ者め明日殉死の時に望み同士討を致せしと後世まで誹謗されんは口惜しからずや 主「スリヤ父上には彌々殉死と御決定にムり升るか 内「再度評議の席に着き盟約の書を改め申さん 藤「我々御同伴の 皆々仕らん「ト立ち懸る向ふより」 右衛門「アイヤ御家老暫くく〇暫くお待下さり升せう「ト花道に平伏する」 金「誰かと思へは貴殿は矢頭 皆々右衛門七殿 内「スリヤ矢頭長助が子息右衛門七とは御手前なるか 右「ハッ部屋住の身にムり升れば未だ御目通りも仕り升せぬ 内「ム、其部屋住の御手前が何用あつて評定の席へは 右「ハッ承り升れば明日當城中にて御一統様殉死を遂げられんどの再度の御決議何卒私をもさし加へられ血判御許し下さるやう偏願ひ上升る 内「ア流石は矢頭長助が子息程あつて健氣な願ひシテ何歳に相成るぞ 右「當年十五歳にムり升内「悴主税と同年じやな 右「左様にムり升る 内「ア御家中敷多ある中に大祿を貪りながら

大野父子如きもあるに未だ若年の身を以て泉下の君に仕へるとは通れ健氣な願ひながら此儀に於ては叶ふまじ○サなせと申せ明日殉死の人々には何れも恩顧の者共計り御身は未だ一日も殿の御扶持を食みしにあらす殊に長助には昨年より長々の病氣の由是が討手を引受て籠城致す儀にあらば一人の力も頼みなれども殉死と再決致せし上はお手前如き少年輩の切腹にも及ばぬ事志しは奇特なれども死を止まつて父が病苦の介抱せられよ 右「コハ御家老様のお詞とも存せず父病氣の身より升せずは疾にも評定の御席に列り血判も仕らんに悲いかな昨年より行歩叶はず私こそ君の御目通りも仕らず扶持一粒も頂かねど父が知行の餘慶を以て斯く成長仕りし御恩は君の蔭ならずやせめて萬分が一なりとも御恩を報じ奉らんと推參致せし私こそ部屋住の身あれども父は代々お家の侍其名代たる私一人何とて泉下の御供が叶ひ升せぬぞ 内「叶はぬにあらねども未だ若年のお事といひ 右「スリヤ拙者一人若年にて御子息主税殿には御若年にのみ升せぬか 内「ヤ 右「御家老様の御子息なれば部屋住にても亡君への御奉公が相叶ひ末々の長助如きが悴にては御役に立すは生て甲斐なき拙者が一命お席を穢し奉る御免下され」ト刀を抜て前に置き肩衣を脱ぐ」 内「矢頭右衛門七待て〜悴彼を止めい 主「ハッ」トツカ〜と行き」 主「右衛門七殿父上が御止め被成る必らず短慮召さるゝな 右「イヤ〜主税殿御放去下され拙者も武門の家に生れ斯程の志を

遂けずして何面目に生長らへんや 主「アイヤ右衛門七殿貴殿心中御察し申先づ御待被成れ」ト無理に刀を引取る」 右「主税殿そこ許が御羨ましく存じ升る 主「殉死は親御承知でムるか 右「其父矢頭長助は死去仕つてムり升る 主「何といはるゝ 右「最期の際に申置れし遺言狀憚りながら御家老様へ」ト懷中より書置を出して渡す」 主「ナ、承知致さした○まづ此白刃を納められよ 右「イヤ御家老様の御下知の御詞承る夫迄は 主「早まり召るな 右「ハッ」ト主税ツカ〜と舞臺へ來り」 主「ハッ父上矢頭長助には死去致れしとムり升る 内「何長助には 金「アノ養生の叶はずして 皆々病死せしとな」ト内藏之助手紙を取り開き見てホロロとあし又感心のこなしあつて思はず膝を叩き」 内「矢頭右衛門七殉死ゆるすぞ近う有ハッ」ト餘りの嬉しさに立兼るこなしあつて肩衣を直シツカ〜と舞臺へ來り」 右「有難う存じ升る 内「ア思ひ出せば去年四月亡君御發足の砌り病の爲に旅立の御供叶はぬとて御玄關先滿坐の中にて痛く歎き悲しみしが今年今日冥途の旅の御供を仕りしか○大切に致せ」ト書置を右衛門七の前へやる」 藤「我々とても片時も早く 十「君の御供 皆々致したし 内「御尤成る各々方の御心中併しながら最早殉死は明日と定めまからは何れも方には一先宅へ引取られ妻子兄弟親子へも明日最期の暇を告げ初夜の太鼓を相圖となし再度登城致されよ其内我は盟書を認め印形申受けるでムらう 皆々委細承知仕る 内「併しながら此度は何れ

も最期の入城なれば五ツの時に遅れし者は門戸を打つて一人も城中へは通すまじ各々着到に遅れ召るな 十「何とて遅参仕らんや 内」シテ當席列坐の人々には 藤「速水藤右衛門 十」磯貝十郎左衛門 金「岡野金右衛門 只」武林只七 源「近藤源四郎 勘」中村勘助 小「小野寺十内 幸」同幸右衛門 安「山上安左衛門 半」菅谷半之丞 彌「具賀彌左衛門 新」勝田新左衛門 八「有橋八太夫 治」三村治郎右衛門 庄「小山田庄左衛門 勘」近松勘六 新「松下新五右衛門 又」潮田又之丞 右「矢頭右衛門七 藤」此外お次に扣へし者には片岡源吾右衛門、萱野三平を始めめとして 十「今日籠城の血判せし者 金」御賢息共以上五十五人にムリ升る 内「抑最初死を誓つて集りし者三百餘人にありしかど今日籠城討死と事極りしに臨んでは五十五人に相成しか〇何れも終日御苦勞千萬 金」左様ムらは大石氏 十「一先退城 皆」仕るでムリ升せう 一「藤右衛門を先に皆々向ふへ這入る橋掛りの前に居並ひし諸士の後ろに居たる心にて寺阪吉右衛門淺野家の印の脊割羽織袴形り足輕の袴らへにて平伏して居る内藏之助向ふを見送り思入有て」内「是迄諸士の強膽をためしみんな其爲に種々又手を替へ心中を探り見し處先づ今晚時を違へず参る者」ト本釣鐘に成り」内「アリヤモウ暮六つ〇亡君去月十四日田村右京太夫殿邸宅にて御生害あらせられし月日のかはれど御最期の時は則暮六つと片岡源吾右衛門當地へ下り我へ送りし君の御辞世」ト懷中より前幕の短冊を出し」内「風誘ふ花

よりも又我は猶春の名残りをいかにとかせん自然とお筆に怒りの籠る末期の走り書此お紀念を見れば見る程〇みまかりし君の名残にあてがれて滿潮増る我涙かな 幸「僅な末の下郎でも其時の御無念を嘆かしと御察し申上る」ト思はず吉右衛門を見て恟りなし短冊を脇へ隠し 内「夫に居るい何者じや 幸」寺坂吉右衛門めにムリ升 内「ム、名は存せねとも見受ればお印付の羽織を着用致するらはお足輕の内の者か 幸」ハッ吉田忠左衛門が組下の足輕でムリ升る 内「其足輕が何とて是には 幸」ハッ下郎如き遙か末の者ながら年來御恩に預りし殿様の不慮の御最期いかにしても歎かはしく日々御殿へ推参なし末坐に扣へて承れば籠城と事定まりし御評議聞て飛立下郎が嬉しと御恩の爲に命を差上素より足輕の役なれば矢種限り根限り敵を射立て切腹と思ひ詰たる籠城も破れて殉死と事變り今晚初夜のお太鼓迄に入城せざるお方には門を閉て叶はずとのお詞を承り直に其座へ駈出んと存じてはムリ升れどお歴々の其中へ下郎一人交りなり油に水と差扣へ御退城迄待升たも此お願が申上たさ何卒お差加へ下さる様偏に願ひ申上る 内「ハテ輕き身分の者には似合ざる健氣な願ひなれども殉死と極めしは心中左程に思はねど武士といふ名に止を得ず迷惑ながら覺悟させじがお身は列に洩れしとて人のあの嘲り誇りのないは高祿受けぬ身の一徳痛い腹など切るには及ばぬ 幸」サ、矢頭様の御子息さへ叶はざりし程なるに下郎風情の足輕がお歴々の其

中へ加入なして殉死と申さばお取上げはムリ升まいが外足輕とは事替はり手前親共吉右衛門先君采女正様御在世の砌り聊な儀がお目に留りお増し扶持を頂戴してより私代に成り升ても當殿様の御情三人扶持六石を其儘下し置れし殿様の御威光にて傍輩仲間の同席にも増扶持衆と敬まはれ上席に直されしも皆御主人の御大恩其殿様には御最期遂けお家断絶の今日何と命を延こりおられ升せうか下郎が願ひ叶はずは今此所で腹かき破り死出の御供致す心底○ナアニ下郎が命一つや二つ捨てたとて御恩に比らべ升れば本の猿が何とやら○御家老様の御厚志を無氣に致すやうにはムリ升れど何卒御情にて殉死の列にお加へ被成て下さり升せ申し御家老様大石様最期の替らぬ同じ城内お先さへ参る御免下され「ト諸肌を脱ぐと下に寺阪吉右衛門信行と襟り印をしたる木綿の白襦袢を着込み居て腹を切ふとする 内「ヤレ待て寺阪吉右衛門斯く迄用意致せしは諸士に勝れし適れ神妙今こそ免す殉死の血判 吉「何スリヤ殉死の列にお差加へ下さり升とぞ 内「其儀に付て内藏之助思ふ所存の是あれば殉死の者ども登城の上誓紙を改め血判を差免さん 吉「コリヤマア夢では有まいかエ、有難うムリ升る 内「其方の忠節亡君にも感心に思召され只今迄足輕なれど此以後百石以上の格式たるべし 吉「スリヤ下郎を百石以上の侍分に○ア、死なれた親仁が聞れたなら無愧ぶて有うもの今の出世が見せたいわい 内「輕き身分の足輕すら斯る忠義の者あるに憎むべ

きは大野親子○最早當城を明け渡すに評議決着致せし上は殉死なすとも大切の今晚火の元を見廻らん吉右衛門同道致せ 吉「ハッ御供致すでムリ升ふそれお明りの用意「奥にて」近習「ハア、「ト是を三重やうの合方に成り兩人愁ひを含み思入あつて内藏之助刀の下緒をは捌くが木の頭にて淺黄幕を冠せ道具出来次第淺黄幕を切て落す

造物真中二間白の壁柱龕の付し瓦家根下と腰袴に成りし石垣九小高さ飾り付是に太鼓を釣り前通り霞手摺向ふ一面に赤穂の町家村々を見たる入海の遠見向ふ正面左右の膝隠し卍澤瀉一つ巴の幕張り挑灯馬印を書割し遠見都て赤穂の城中太鼓櫓の体爰に内藏之助立身吉右衛門挑灯を差出し兩人下を見込とし見得詠らへの合方にて道具納る 淨る「暮渡る早亥の刻に近付て曲輪の廻り十重廿重警固の諸侯嚴重に取圍んだる陣小屋の提灯松明篝火に照らす赤穂の三の丸乾に建し梁も太鼓櫓のいと高く實に太平の有様も傾く武運ぞ是非なければ時刻移れば内藏之助寺坂伴ひ立登り 内藏之助「いかに吉右衛門家中の者共籠城との噂さ高く聞へしにや此度の官使脇坂殿の與力として隣國諸大名人数を出して諸道を固め山海共に人ならざる所もなし 吉右衛門「中に目立て見へたるは脇坂殿の御同勢斯く近々と陣を取りしは流石天正の其昔攻守の手立は脇坂家を以て鑑にすべしと咄しに聞しに違ひなく勇ましいではムリ升ぬか 内「イヤ吉右衛門左にあらず強氣を頼みに進む者は必らず城を取るべからず我

籠城の心あらは一微塵に致さんもの今は夫にも及ばねど斯様に近く野陣を張ては殉死の面々登城の妨げ最早初夜にも近附けば一鼓を以て退け得せん○ソレ 源「撥取上げて山鹿流法を正して打込ば」ト太鼓撥を取り山鹿流の陣太鼓やうに五つの時を打つ 源「響に驚き乱れ立退くさまの見苦るしく寺坂四方屹度見下ろし 内「アレ」御家老御覽あれ太鼓の響に驚てや陣中俄に騒立ち右往左往にこけ轉び逃行さまの見苦るしさ 内「此處に乗じて追ひ討たは先は大海後ろの敵生を保つ者は有るまじノウ吉右衛門 内「ム、成程 源「退く方を兩人は暫し詠めて居たりける折柄片岡源吾右衛門時刻遅しと駈來り」ト片岡源吾右衛門腕斗目麻上下の拵らへにて着到帖を持ち後ろより出て來り」源吾「内藏之助殿 内「貴殿は片岡源吾右衛門殿 源「定めし時を違へずして駈參つたる人數の着到御披見下され」ト帳面を渡す」内「明りを見せい 内「ハッ 源「ハッ」差出す提灯の明りに調ふる着到帳其姓名もついのあい半ば減せし順列に内藏之助歎息なし 内「ア頼めぬ者は人心今日城を枕に討死と誓紙へ血判致せし者も僅か一時立ぬ内殉死と聞て又も半ば減少なせしか 内「スリヤ最早方々には内「斯くあらんと存せし故敵日手を替へ品を替へ誓紙の約を違へしも諸士の心を試めさん爲合晩集る人々こそ實に以て眞の忠臣此人數にて事を計らば上野殿の首しを見ん事疑ひなし 源「スリヤ殉死と號して今晚城へ集めし 内「家中の心を引見ん爲 源「實は歎 内「吉良殿

をば 内「アコレ」ト押へて兩人は叫び 内「凡仇を報はん事難き例しは豫讓のあら炭越王は薪に臥し給へり 源「流石の御家老思慮に思慮ある 内「御計らひ 内「只速に當城を明渡しに離散なし本望達せし其上にて泉下の君に御奉公をば 内「ア去りなから御領地五萬三千石一目に見渡す津々村々 源「君が餘澤に業を樂しみ朝夕豊に立登りし 内「民の體の賑ひもけふを限りの御領分 内「五十二村の 内「是が見納め 内「お名残り惜うムり升る 源「今宵限りの名残りぞと思ひに目と目を見合して暫し涙にくれ居たる」ト後ろよて本鉄砲の音して角の柱に石火バツト立ッ 内「いづれの陣やら 内「櫓を目掛けて 内「提灯消せ 内「ハッ」ト内藏之助懐中物をゆすり込むのが木の頭 内「餘程作法を存せぬやつじやの」ト吉右衛門は提灯を吹消す源吾右衛門は左様でムるといふこなし此仕組宜しく拍子幕

大詰 登野三平切腹の場

役名	一登野三平	一岡野金右衛門
一片岡源吾右衛門	一武林只七	
一登野和助	一僧了念	
一娘於眠	一婆々於德	

一下 女 於 仙

一萱野七郎右衛門

一下 男 作 藏

一百 姓 大 勢

造物平舞臺見附小摸様の唐紙折廻りの家体此内結搦なる佛壇是に佛具一式飾り真中に位牌
 香炉盤に香をたき燈明を照し有り下手白壁の塀いつもの所縵子張りの株木門都て郷土屋敷
 の摸様了念墨衣僧の拵へにて佛壇に向ひ叩き鉦を鳴らし居る前幕百姓大勢百萬遍の珠敷を
 繰り此中に於民振袖娘の拵らへにて交り居る下手に作藏下男の拵らへにて膳を扣へ飯を喰
 ひ居る於仙下女の拵らへにて客膳を並べ居る此摸様叩鉦百萬遍の念佛にて幕明く 大勢南
 無阿彌陀佛く 於民ア、悪い事を被成んすないなアトこちらへ逃けて来る」 於仙いと
 様どう被成升たぞいなア 民アノ珠敷を繰る度に私が手を握るわいのう 仙夫とマアけし
 からぬぞなたが其様な事を 民小泉村の源十様がいのう 仙申せなたもてんどうして下
 さり升るな 大勢南無阿彌陀佛 仙久住六郎太夫と申されては帶刀御免の名主の御息女
 大勢南無阿彌陀佛 殊に御連合も定てムリ升ぞへ 大勢南無阿彌陀佛 仙イ、エイなア爰
 のお家の三平様といふれつとさとした 大勢南無阿彌陀佛く 仙コリヤモウ一向馬の耳に
 念佛じやわいなアト責念佛と成り了念鉦を打切り」了念願爲之功德平等施念佛衆生攝取
 不捨南無阿彌陀佛ト奥より和助脇差形りにて出て來り」和助是は了念様始めぞなたも御

苦勞に存じ升る何はなくとも御膳をば了是はく和助殿今日は御奇特によろお勤め被成
 升た 婆々「イヤモウ私等は遠慮おしに 〇いかふ馳走に預り升たモウ何にも這入り升せぬ
 △お寺様には私に搦はすゆつくりと 〇よばれさつしやつたが 皆々ようムるぞや了イヤ
 ヤく寺へもけふは七ツ時といふ葬禮が受取てムれば皆の衆是でお暇と仕升せうか ×そ
 んならさう致し升せう〇扱今日は 〇イヤモウ満腹をして戻り升す 〇親御様が戻られ升
 たら 婆々「宜しうかつしやつて 皆々下さり升せ 和夫ではモウ御歸りでムリ升るか 仙
 わなた方マア宜しいではムリ升せぬか 民よう參つて下さり升たなア了サア參り升せう
 「ト了念先に百姓皆々這入る」作本にやかましい衆達じやわいなア 和とんと大水の引た
 跡の様じやト三人そこらを片付ける是を床の淨るりよあり」淨るり「行水の流れと同じ人
 の身の未定めき赤穂の浪人本國退去なしてより所々に散在せる中に萱野三平故郷に歸り爰
 に立日も一歳せの廻りも早き母佛の忌帛ひの墓戻りト向ふより前幕の三平中月代着流大
 小の拵へにて編笠珠敷を持ち出て來り」三平誠や光陰矢の如しと故郷に歸りて早一歳せ母
 の忌日も亡君の御命日さへ散りく身に隔つとも御家老へ堅き誓ひ彼大義最早彼地へ出
 立の程近ければ親人にも餘所ながらの暇乞は心苦敷事共じやなアト向ふ方金右衛門只七
 小紋半天股引鞭先羽織割掛けの荷物を肩に打かけ出て來り」金右衛門「夫へムるは 兩人萱

野氏でいふらぬか 三「ヤレなつがしや岡野氏武林氏一別以來先は健固で見れば旅の出立は
 何れへ旅行致さるいぞ 善尋ねに兩人邊りを見廻し 只七左れば此度彼事にて關東へ下る
 に付き片岡殿の仰せには兼て貴殿にも同行の約束なれば 金此儀通知いたしてくれよと源
 吾右衛門殿の差圖に任せ此段知らせに 兩人參つてムる 三「スリヤ片岡殿に發足召るい
 とは實は其便りのみ日々待ち暮らせし所よくこそお知らせ下された 只源吾右衛門殿には
 大阪住居の同士者へ江戸出立の儀を知らせ一旦彼地にて落合ふ約束 三「左様でムるか併し
 ながら同士一統契約の通り父を始め弟へも明さる儀にムれば只今御同道は何かの不都合
 甚だ失禮にはムれども後方迄何れにか御休足被下まいか 金何様左様な儀もムらう夫では
 武林氏今道を尋ねし海道の茶店にて片岡殿と待合せ 只成程後刻同道の致して參らう 三「
 然し表立ば人の思惑も如何でムれぬの門より左へ取り裏より御入來が願ひたい 金承知
 仕つた左様ムらば 兩人萱野氏 三「御両所 兩人後刻御意得るでムらう 三「兩人引返し這
 入る」 三「待設けたる關東下向どうか親人のお免しが受けたいものじやがト居直る此内和
 助は佛壇に仙香を立お民水をしかへて居る」 三「親人モウ御歸りにムり升るか 三「いひつ
 い這入る三平を於民は見るとより 民「ナ、三平さん御歸りかきつう案じて居たわいなア和
 助親人にいお先へお戻りでムり升たか 三「サア勤經が濟で後ち住持と四方山の咄しの内

先へ參ると仰せられしがまだ宅へはお歸りはないか 仙「ハイまだお歸りでもムり升せぬ
 三「何所へお立寄被成たか知らん 三「父の戻りを待詫る心を知らぬ娘の於民「ト茶を汲で來
 り」 民「ハイお茶一つお上り被成升せ 三「ナ、於民殿搦ふて被下な 民「何のマア他人では
 有るまいし 三「作藏 作「ハイ何ぞ御用でムり升るか 三「太義ながら小池村の十兵衛殿が事
 に寄たら於民殿の宅へでも親人が立寄られしも知れぬ故其外心當りの所をば尋ねお迎ひ申
 てくりやれ 作「ハイ畏り升たわんまり腹が張過た所へ丁度よい此お使一走り往て參り升せ
 う○若旦那親旦那へは何の御用でムり升る 三「ハテうちの存じた事ではない早う參れ作
 アモ親旦那が何の用じやとおつしやつたら 三「エ、早う參れと申に 作「ハイく行けから
 行けで何も其様に白眼まいでもよいではムり升せぬか○夫では若旦那○とつこいふたら
 又阿られるドレだんまりで往て來やうかト向ふへ這入る」 三「於仙殿御苦勞ながら手前が
 居間に直しある兩掛の右の片荷をどうぞ是へ 民「着類でも召替へ被成んすなら私が取て來
 升せうわいなア 三「サア旅の着類が入用なれどこなたには分るまい 三「といふに和助は不
 審顔 和「ア、イヤ兄上旅の着類が入用とは若しやあなたは御旅行でも 三「左れば生得病身
 の手前故母の一周忌も勤たれの保養旁々江戸へ出身の有付を求る心底親人へも兼々願ひ置
 たればお歸り迄に其用意を和「スリヤあなたには江戸表へ 民「ユレ仙三平さんは江戸へお

出被成るわいのう 仙「何其様な事がムリ升せう〇餘もやあなた其様な事を 三「イヤ是は只今申さいでも親人戻れば分る事コリヤ手前が取て參らう 淨」と立つを押留め 兵「イエ〜」持て來いでならぬ物なら私が持つて來るけれど 仙「どうやら氣に成る今のお詞 兵「仙どうせうぞいなア 仙「サア夫も親御様のお歸の上と有るからは仰せ付のお荷物をば 兵「夫じやといふて 仙「ハテマアお越し被成升せいなア 淨「本意なきお民を無理やりになだめて奥へ入りにける和助は兄の傍へすりより 和「兄者人何ぞお心にお望みがムリ升るか 三「エ 和「イヤお隠し被成升るな去年赤穂離散の後ち家へお戻り被成てより何となく心中に思ひ有る御様子殊に御供養の爲と有つては必らず月に兩度京へお越し被成るゝは山科にムると聞くお國家老大石様と何ぞ謀る事でも有つて若し敵討〇サア左様な思立でもムリ升れば私とても兄上と暫くなれども御奉公致し升たる御恩の御主君聊かなりとも忠義をば盡したき日頃の心願萬一左様な儀に付て關東へ御下向の事なれば何卒拙者も御供をば 淨「いふを三平打消して 三「コリヤ弟夢だに思はざる左様な事を申立萬一人の耳にも入らば親人迄いかい迷惑我々兄弟淺野家へ奉公致せばとて三代相恩の主にもあらず千石以上の大身すら國を出奔致したる大野九郎兵衛親子の者又大石殿とて其通り貯金の有るに任して都山科に松杉植梁に成る日は楽しんで居らるゝは大きに不忠の様なれども今の武士は皆其通り況んや我々

風情の者聊の御恩に預るとて命を的に何の致さう左様な事ハ申さぬ事じや 和「スリヤ兄上には其思召はムリ升せぬか 三「アハ、、異な所ハ心を付けかつたわい 淨「態と紛らす笑ひにも愁ひを含む折からに立歸る七郎右衛門「ト向ふより七郎右衛門羽織着流し大小更たる郷士の袴らへよて足早に出て來り」 七郎右衛門「此事申聞なは忝も嘸くし悦ぶならん取譯けふの佛婆々めも悦ぶで有う「ト居直り」 三「三平はモウ戻つたか 淨「いふもせきたる父が足元「内へ這入る」 三「親人只今お戻りでムリ升るか 七「ナ、三平まだ寺では有るまいかと存じてかつたに是では使を走らせいでもよいといふもの 三「其使と申せばあなたの御迎いに作藏を遣し升たが 七「イヤ彼には行逢はぬが何ぞ用でも有ての事か 三「イエ其用事よりどうか拙者に御用の様子 七「イヤ其用と申は其方に悦ばず事が有るじや併し斯様な事は若い者に聞かしては顔赤らめる事も有うコリヤ和助其方は奥へ參つて誰ぞ下男に申付け入口の仕出屋へ參り急に獻立の詔らへが有れば同道致せと申せ 和「畏つてムリ升る「ト立ちとするを」 七「コリヤ〜其戻りに酒屋へ立寄り酒一挺持てと申せ 和「ハッ 七「コリヤ待たぬか皆聞て立てやい〇ろこで道具藏より三つ組の盃銚子イヤ〜是は身共が出さう 和「然らば夫で宜しうムリ升るか 七「ナ、よい早くと申せ 和「ハッ「ト立ちとするを」 七「コリヤ皆聞て立てやい 和「ハッ〜」 七「三平に月代させねばならぬは床屋へ走らせ直に參れといひ

やれよいな○エ、何をじつとすはつておる早く行ぬか 和「ハツ」 海「父か氣質の性急に心迷ふて入る跡へ引違へたる娘の於民於仙諸共奥より立出」ト兩人にて両掛の片荷を重さうに持ち出て來り」民「チ、伯父さん今お戻りでムんしたかいなア 七「チ、於民女郎か於仙殿にも今日は生憎下女が不在ゆへ遠慮なく遣ひ立て、嘸草臥たて有う○何じや両掛の片荷をば二人して何をさつしやる 民「サア三平さんが江戸へ旅立被成んす故 仙「取て來いと仰せにて 海」と聞くに父親不審の眉 七「何じや悴が江戸へ旅行の致す三平うちや左様な心が有るのう 三「ハツ先達てより申上置升たる通り兼て頼し仕官の口が是有る故目見得旁々下れと有る古傍輩より態々知らせ幸ひ連もムり升れば直様發足致さうと存じ升て 七「だまれ 三「ハツ 七「尤其事を手前へ申た事も有りしか生得武を好む其方仕官の望み有るなれども是は甚だ心得違ひ忠臣は二君に仕へず貞女は両夫にぞ見へずの教へ我も元は大島出羽守殿へ仕へし身なれば一旦職を辭してより二君に仕へる所存は素より舊主に戻る望みもなく郷士とは相成つたれをせめて子供等兩人にはよい主とりを致させたく古主大島殿の進めにより淺野家へ奉公させしが内匠頭殿なればこそ若年といひ病身の其方をお目にかければ御恩の程は寐た間も忘れぬ七郎右衛門其主人には不慮の儀に付御家斷絶よしや千石萬石の知行を以て抱うとも内匠頭殿のお恵みを思はし辭退致さにならぬ筈をば望んで二君に

仕へんとは勞々以て不埒千萬○サ夫も若年の其方故心付かぬ事でも有う毎度うちにも云ふ通り久住殿の是なる息女ぞういふ縁か女房めが心に叶ふて悴が嫁又申受け添してやつてくれとの遺言然るにお家の大變にて浪人して戻りしは誠に佛の道引し所と早速申聞せしなれど母の思みの明く迄と申も無理ならざる事故今日迄でも引延ばし幸ひ一周忌の事なれば佛事の席にて内祝言をいたさせなは嘸佛も悦びおらうと寺より戻りに両親にいひ入れたればいかひ満足夕刻夫へ參ると有る詞を聞き戻て見れば仕官の爲に江戸行と亡主へ不忠親への不孝萱野の家は誰が立るぞ 海「道を守りし爺親の詞に答へん様もなく胸を痛むる計りなり夫と知らねは於民は悦び 民「ようかつしやつて下さり升た親御様の御威勢にてお留め被成れて下さる計りか今宵内祝言をさうとはコレ仙御禮を申てたもひのう 仙「夫はモウ私の様な一季半季の奉公人でもお仕へ申す御主人様の御願ひが叶ふと思へば嘸旦那様にも奥様にもお悦びてムり升せう御禮におなたよりか果被成たか家様へお線香などお上げ被成升せいなア 民「本にさうで有つたわいのう 海「いそ／＼悦ぶ娘氣の耻かしいさへ何所へやら一間の内の佛壇へ向ふお民の手向をば見る爺親は猶嬉しく 七「悴あれを見よ他人の子でさへあの通り女房の遺言を嬉しと思ふて居る者を現在母の遺言に背き父を捨て、も二君に仕く此家が潰きたいのか 海「かさにかゝりし一言に三平ハツト頭を上げ 三「ア、イヤ親人全

く左様な儀ではムリ升せぬぞ生れ付たる病身にて百姓業のならざる三平とゆう弟和助へお譲り下さり升て、キエ、たこけを申せ百姓の勤めならぬ程にて武士の勤か相成るかじたい斯様な事は誰が取持て誰か勤めじや、三、サ其お世話下さり升たは、キ餘も自己一身の望みでは有るまい、三、ハッ大石内藏之助殿の○御推舉でムリ升る、キ何大石内藏之助○アハ、大方左様な事と思ふた世よ有る時は千餘石の大祿をはみながら主人の恨み晴さうとは致さず晝夜呑み耽り取り所もなき馬鹿者とは此邊迄もさつ評判道をいは、異見をも致すべきにかのれが心に引くらべ二君に仕へる推舉杯とは聞しに増る大たこけ手前内藏之助に逢ふた上耻面ヲかゝして斷つてくれう、三、ア、イヤ父上其推舉は大石殿にムリ升れと去年四月退去の砌り傍輩共と両三人申合せし仕官の誓約既に今日其者共と同道致す今日と相成り違約は武士のなさる所何卒拙者へお暇給はりお預け申せし配分金をばどうぞお渡し下さる様偏にお願ひ申升る、三、思入たる三平が願ひに父も諫め兼、セ、スリヤ其方はどう有つても、三、假令不忠の名は取升ても、民、モシ伯父さん、キ於民女郎、仙、コリヤマアひよんなお望しやわいなア、三、父もあされて顔見た計り出す詞もなき所へ下男の作藏一目散宙飛ぶ如く駈け歸り、「ト向ふより作藏草履を片足持ち走り出て來り」、作藏、御注進、キ、たこけ者め心配最中へ何を申す、作、何を申じやムリ升せぬお目出度と申さうか御結構と申さうか

コレ於仙とん水でも茶でも一ばい、仙、是はしたりとゆうしたのじやぞいなア、三、何事やらんと汲で出す茶碗の茶をぐつと呑み、作、アツ、、○於仙とんとくせうな目に合すじやないか、仙、何をマア其様にあはてさかして何がとゆうしたといふのじやぞいなア、作、何がといふて旦那様最前あなたの御迎ひに小池村から芝村へ廻つて往て見升た所が於民様の親御の所じや酒樽一挺鏡を抜き近所の百姓一同が大酒盛り今夜こちらの若旦那と内祝言が有るに付其悦ひの振舞酒と聞て私も茶碗に三ばいよばれて戻る道々も誰に逢ふても目出度と旦那様への言傳計りゑらい噂でムリ升るぞや、三、大息ついでの咄しをば爺親が何思ひけん肌くつるげ刀取る手にまがみつき、作、旦那様コリヤとや被成升るのじや、民、仙、あなたは何と被成升るぞいなア、キ、我も帶刀御免の萱野七郎右衛門一旦約して戻つた上忤が得心致さぬとて迄のつら下けて斷りが相成らうぞよし斷りを申た所が久住殿も武士なれば村中の手前了簡成るまじ夫じやに因て此場に於て、民、ア、モシ伯父さん待て下さり升せ斯ういふしぎに成行しも田舎育ちの身を耻す永らくお江戸へ出てムつた三平様を見る様な殿御を夫トに持ちたいと此於仙からと、さんやか、さんにせがましたのも親の慈悲よて先様さへ御得心なら添はしてやらうと嬉しい仰せを樂みに待に待たるけふの今内祝言をさうどの親御の情が仇と成り江戸へ仕官のお望みも此身がいやさの御旅立思ふ殿御に嫌はれて何と生てお

升せう私がなくば三平さんも愛な御家の跡も繼ぎ御奉公も成さんすまい親御様の御苦勞もみんな此身がある故あればあなたへ替へて此お民が「ト」刀に手をかけるを」セ「ア、コレ不所存な悴めを持たが親の皆因果決してこなた故ではある此七郎右衛門腹切らねはこなたの親御に濟まぬわい 民「イエ、あなたを死なしては私が濟み升せぬわいなア 民「イヤ、放せ 淨「死を極めたる一腰をやらじと争ふ二人を押止め 作「マア旦那様も待て下さり升せ 仙「於民様も早まつた事被成升ないなア 七「作藏止めるを 民「於仙も止めてたもんないのう 淨「猶も止まざる争ひに三平思案の胸をすへ 三「アイヤ親人於民殿にも早まられな祝言承知 家督相續仕るでムリ升せう 淨「と思ひ切たる一言に親も於民も夢見し心地 七「何じや承知じや 民「そんなら旅立を 三「思ひ止つて下さり升るか 淨「いへば三平涙を吞込み 三「いふにいはいぬ契約にて致さにならぬ仕官なれども此三平故生先き有る於民殿の一命にもかゝる父が必死の御覺悟何と是が見過されうぞ○お詞次第に 淨「襟に喰付き忍び泣く泣くとも知らぬ父が悦び 七「チ、出かした悴夫でころ淺野家の祿をはんだ適れ侍實は此七郎右衛門其方一人子ではなく次男和助も有る事なれば好た事なら心の儘に致して遣はしたけれど「トそつと切る仕形をして見せ」 七「ナア晴す様な事なれば萱野の名跡絶す共忠義の爲にと厭はねども「君よ仕へるなんぞ、不心得の望みを起し亡君の御紀念に頂戴せし配分金を

無益に費し又再び故郷へ歸りなば夫こゝ世上の物笑ひ左すれば親も耻辱なり第二古主への瑕瑾でないか 淨「さどす詞に三平思案し 三「スリヤ亡君の御無念を晴らし奉る儀でムらは 七「夫こそ何の止め様ぞ悦んで暇を取らすわい 淨「いつろ打明け有の儘いはんとせしが誓紙を守り 三「左様な事なら三平もお暇願ひは致し升せぬ 七「ソレ見た事か其心故止めたのも主人がなければ第一が親への孝行けふの佛も悦ぶで有うわい 三「左様なれば拙者めい暫時が間部屋へ參つて 七「何をいたす 三「エ、「トぎつくりして氣をかへ」 三「髪月代など致し升せう 七「チ、左様致せい、い、曠れ成る今宵の祝言 三「拙者が爲には一世一度の 七「大禮なれば衣服を改め 三「死出の曠着に 七「エ、 三「イヤ用意致すでムリ升せう 淨「常に變りて慇懃に述る両手の挨拶も父に別れの暇乞しはくとして立て行跡にはうきく氣はるはく 仙「サア、急にお目出度う成て來たコレ作藏殿お屏風の用意はよいかへ 作「チット夫は奥藏へわしがいで來ふ 仙「是といふも七郎右衛門様のお蔭ちやつとお禮かつしやり升せいなア 民「お伯父さん大きに 仙「其様な御禮で濟み升せうか両手をつかへてお行儀に 民「夫じやといふてわしやどうやら 仙「お耻かしいも御尤夫では先へおぐしから 民「どうぞさうしてたもひのう 仙「左様な旦那様今晩はお目出度う存じ升る 淨「主の機嫌に連れる下女件ふてこゝろ入りにける 七「アハ、若ひ女といふ者は罪のないもの夫にモウ最前人

升せう私がなくば三平さんも爰な御家の跡も繼ぎ御奉公も成さんすまい親御様の御苦勞も
 みんな此身がある故あればあなたへ替へて此お民が「ト刀に手をかけるを」セ「ア、コレ不
 所存な悴めを持たが親の皆因果決してこなた故ではあゝ此七郎右衛門腹切らねはこなたの
 親御に濟まぬわい 民「イエ〜あなたを死なしては私が濟み升せぬわいなア セ「イヤ〜
 放せ 淨「死を極めたる一腰をやらじと争ふ二人を押止め 作「マア旦那様も待て下さり升せ
 仙「於民様も早まつた事被成升ないなア 七「作藏止めるを 民「於仙も止めてたもんないのう
 淨「猶も止まざる争ひに三平思案の胸をすへ 三「アイヤ親人於民殿にも早まられな祝言承知
 家督相續仕るでムリ升せう 淨「と思ひ切たる一言に親も於民も夢見し心地 七「何じや承知
 じや 民「そんなら旅立を 三人「思ひ止つて下さり升るか 淨「いへば三平涙を吞込み 三「い
 ふにいはいぬ契約にて致さにやならぬ仕官なれども此三平故生先き有る於民殿の一命にも
 かゝる父が必死の御覺悟何と是が見過されうぞ〇お詞次第に 淨「襟に喰付き忍び泣く泣く
 ども知らぬ父が悦び 七「チ、出かした悴夫でこゝろ淺野家の祿をはんだ通れ侍實は此七郎右
 衛門其方一人子ではあく次男和助も有る事なれば好た事なら心の儘に致して遣はしたけれ
 ども「トそつと切る仕形をして見せ」 七「ナア晴す様な事なれば萱野の名跡絶す共忠義の爲に
 と厭はねども「君よ仕へるなんぞ、不心得の望みを起し亡君の御紀念に頂戴せし配分金を

無益に費し又再び故郷へ歸りなば夫こゝろ世上の物笑ひ左すれば親も耻辱なり第一古主への
 瑕瑾でないか 淨「さどす詞に三平思案し 三「スリヤ亡君の御無念を晴らし奉る儀でムらは
 七「夫こそ何の止め様ぞ悦んで暇を取らすわい 淨「いつろ打明け有の儘いはんとせしが誓紙
 を守り 三「左様な事なら三平もお暇願ひは致し升せぬ 七「ソレ見た事か其心故止めたのも
 主人がなければ第一が親への孝行けふの佛も悦んで有うわい 三「左様なれば拙者めい暫時
 が間部屋へ參つて 七「何をいたす 三「エ、「トぎつくりして氣をかへ」 三「髪月代など致し
 升せう 七「チ、左様致せいはい噴れ成る今宵の祝言 三「拙者が爲には一世一度の 七「大禮
 なれば衣服を改め 三「死出の贖着に 七「エ、 三「イヤ用意致すでムリ升せう 淨「常に變り
 て懇懃に述る両手の挨拶も父に別れの暇乞しは〜として立て行跡にはうき〜氣はろは
 く 仙「サア〜急にお目出度う成て來たコレ作藏殿お屏風の用意はよいかへ 作「チット
 夫は奥藏へわしがいで來ふ 仙「是といふも七郎右衛門様のお蔭ちやつとお禮おつしやり
 升せいなア 民「お伯父さん大きに 仙「其様な御禮で濟み升せうか両手をつかへてお行儀に
 民「夫じやといふてわしやどうやら 仙「お耻かしいも御尤夫では先へおぐしから 民「どうぞ
 さうしたもひのう 仙「左様な旦那様今晚はお目出度う存じ升る 淨「主の機嫌に連れる
 下女件ふてこゝろ入りにける 七「アハ、ハ、若ひ女といふ者は罪のないもの夫にモウ最前人

を走らせた仕出し屋の主は何をして居るユキヤ作藏魚利へ走り同道して来い 作宜しうム
 リ升連れ立て歸り升せう セ「ユキヤ」〜 龜相申な内祝言とはいへ歸るとは忌詞何事も祝ふ
 て參れ 作「そんな事なら何にもいはずに死た氣で行き升せうわい」セ「こいつ喜延の悪いや
 つでは有るわい魚利へ往たら魚の吟味を致せと申せ 作何ば吟味した所が此ぬくさでは腹
 が切れてかり升せう」セ「夫が悪いわい」作「モシ」〜 且那樣さう天窓を振り立たら其お
 首が落ち升わいの」セ「まだ申おるか 作何も申ておりは致し升せぬ此草履の鼻緒が最前」
 ト以前の草履を取て見せる」セ「如何致した 作切れ升た」セ「エ、」ト扇を開らくのが道具
 替りの知らせ」セ「鶴龜」〜 作「此養生が叶へばよいが」ト七郎右衛門は喜延の悪しきこゝ
 じにて扇にて煽ぎ拂ふ作藏は鼻緒を立る此模様宜しく合方返し

造物三間の常足本椽付の二重見付上の方床の間建棚是より下の方墨畫の唐紙前側障子上下
 共落間跡へ寄せ庭扉此前一面に卯の花の盛り舞臺前サツキの大手板能き所に石燈籠手水鉢
 いつもの所家根付の枝折門空より楓の釣枝都て郷士屋敷庭先の模様合方にて道具納る 淨
 リ「立つ月日頃も卯月の半ば過空の景色もさのふけふ催と雨と知り顔に雪とこはれし卯の
 花の垣を隔てし一間には萱野三平重次が位牌に向ふ讀經の聲もしめりて哀れなり」ト前側
 障子引抜く爰に三平好みの着附に着替へ厩机の上に位牌を直し回向のこなし 三平「冷光院

殿前少府朝散太夫吹毛劔利大居士○無御無念にムリ升せう 去年三月十四日殿中松の間の御
 廊下にて何事の御遺恨にや吉良上野介に切りかけ給へ終に御本意を遂げずして即日の御
 切腹臣萱野三平不肖の者に候得共敵「トあたりを見廻し」三「上野殿を討奉り君が修羅の御
 無念を聊慰め奉らんと退城の砌り内藏之助殿の内意に應じ既に今日同士の者と東武へ下り
 本意を達せんと待設けたるかひもなく妻を娶りて萱野の家を相續せよとの勧め父は義堅
 き者なれば所存の程を打明けおは無悦んで暇をも賜はる事は知れては有れど親子兄弟始と
 し 淨「假令妻子に至る迄大事と洩さぬ堅めの誓約 三「其誓約に違ひなは大石殿を始めとな
 し同士の者へ萱野三平面を向くべき様もなく左りとして父のお許しなきに江戸下向も相成ら
 ず忠孝兩端に迷ふ身の 淨「心の内の苦しさを君にも察し給はれかし 三「所詮父の許しなけ
 れは復讐の儀は相叶はず神文誓紙の約に背き同士の人へ濟ざる三平親と同士の方々へ言譯
 には切腰なし相果るより外になし 淨「恭しく長矩が位牌に向ひ両手をつき 三「今日只今萱
 野三平我君の御靈前にて殉死相遂げ君のまします彌陀の淨土のお側へ參つて御奉公仕るで
 ムリ升せう 淨「世に有る君にいふ如く涙と共に再拜おしせめて最期の子細をは大石殿へ書
 殘さんさうじやく 淨「涙拂ふて立上り傍へに直す荷物より取出す君が拜領の硯の御紋見
 るよ村御恩の程も高島の石に受けたる水の海深き恵みに百年の齡ひを墨の短かくも縮むる

筆の命毛や「ト此内三平兩掛けの中より時繪紋散らしの旅硯を出し花活の水を受けて書置を書きに掛り文句は留り一つ鉦獨吟念佛に成り書終りて封をなし上書をして」三「折りも折とてアノ念佛は儘に父の御看經思ひ出せり去年の春國へ急を告る節途中に於て母人の葬送に逢ひ奉り今年今日其日に當り切腹致すしぎとなりしも母上の導き給ふもの成るか何にも致せ先立不孝は親人様御免被成て下さり升せ」海「見廻すかたへの對立に紀念の辞世かくばかり○流石に猛き三平も父の怒りを思ひやり暫し涙にくれたりしが急度心を取直し」三「我ながら不覺の涙時移して同士の人々今にも是へ來りなば約せし詞面目なし○よ、海覺悟極めし三平が心はせけを武士の古實乱さず諸肌脱き探る弓手の脇腹へぐつと突立つ白刃の切先一文字にこそかき切つたり斯くとも知らぬ娘の於民奥の一間をいろく立出」兵「三平さんお部家にでんんとかモウ追付祝言の時に間もない日暮前早う支度をしやしやんせぬか○是はしたりうたゝ寐して風引て下さんすないかア」海「ゆする手負の片息にお民は夫と見て胸り」兵「やエロヤ三平さんは○モシ伯父さん早う來て下さんせ伯父さんく」海「聲を限りに呼び立てば何事ならんと七郎右衛門和助も共に走り出」七郎右衛門「けたゝましい呼びやう」和助「於民殿どう被成たか」兵「三平さんが腹切らしやんしたわいなア」海「わつと計りに泣入れば七郎右衛門腰打抜かし」セ「エ、○三平が腹切つた」和「誠にエロヤ兄者人には海

餘りの事に親子が轉倒苦痛の手負を引起し」セ「コリヤヤイ三平扱われの望みをは許さぬ故に此親へつらめてに腹切たか腹切る程の根性を持たば敵の屋敷に切入つて家來一人にでも疵をつけなせ腰拔武士の眠りを覺さぬぞ大死なして親の心に背くが已れば本望かいほうやろない不孝者めが」海「苦痛に惱む三平のたぶさ掴んで引倒し腕も折れよと打すへる父が怒りの荒折檻於民は見るに堪り兼」兵「マアく待て下さんせ親御様への御不孝もか氣に叶はぬ此民と今宵祝言する事を物憂き事に思召腹切らしやんしたに違ひはない是程迄に嫌はれた此身と知つたら最前に死んだら親御や弟御に此お歎きも掛けまいもの是もみんな私故堪忍して下さいなア」海「詫る詞も半分は恨み涙にくれければ三平苦しき顔を上げ」三「此三平が切腹は更々こなたを嫌ふではかい素より親には不孝なれども是には段々子細の有る事」セ「子細があらは夫を申せ親の役目聞てくれうは」和「いか成る譯か兄者人それを聞くと下さり升せ」三「いぬく只何事も是迄の壽命とおぼし諦められ憚りながら夫成る紙面お手渡し下さるやう御願申す親人様」海「いふに傍への机の一書にがり切て手に取上げ」寺「何大石内藏之助様參る萱野三平」和「スリヤ大石殿へのお書置にムリ升るか」三「いかに萱野三平が仕官の儀をはお断はりの」セ「だまれ三平親兄弟にもいはれぬ事とい如何成る義理と思ひしに内藏之助への断り状とは見るも中々穢らはしいわい」海「老の怒りもこらへ兼手

紙の封をむしり切りすでに破却なさんず体を見るに三平打驚 三「コリヤ親人命に替へし夫成る書狀を破却あつては大石殿に 七「濟まぬとぬかすか犬畜生を見る様な内蔵之助へ義理立とは不所存極る人外めが 淨「両の腕をねち上げて膝に引ッ敷き手紙をば引裂んとする其手に縋り 民「伯父さんマア待て下さんせ三平様が身に替へし其お手紙と有るからは何ぞ子細の有りさうな事どうぞ讀んで見て下さんせいなア 七「エ、何の子細の有るべき事 民「ではムリ升せうがどうぞ御慈悲に 淨「お慈悲と取纏る於民が歎きを持って餘し 七「ム、手に取るさへも穢はしき手紙なれどもお身が歎きの心ゆかしにどんな内蔵之助への言譯あるか讀で聞かさう 淨「ふせうぐに讀下したる其文言 七「一去年赤穂御城内にて連印の通り亡君の御仇を 淨「父上何と 三「おつしやり升る 七「エ、靜にせい 〇亡君の御仇を「ト大きくいふて心付き 七「エ、靜にせいやイ「ト立かゝり早腰を抜ていさりなから門口へ行き枝折戸をしめはつと思入あつて 七「連判の通り亡君の御仇を討ち奉る覺悟に御坐候〇ヤイ悴コリヤ何じや〜二君に仕へる仕官の詫に亡君の仇を討奉るとい 和「若しや拙者が察せし通り敵討のお約束でも 三「知らぬ〜其状戻して下さり升せ 民「イヤ〜伯父さん早う讀で下り升せいなア 七「よまいでい〇年内も度々仰せ下され候通り當月中には是非江戸表へ下向と存じ罷在候所父七郎右衛門一向内々の大望は存せず〇何じや父七郎右衛門一向内々の大

望は存せず江戸下向の事ひしと押留め誠に拙者の難義言語に絶へ内々の様子申聞け候はし中々悦び申べく候得とも誓書の表より相違仕候はん事いかいと存し申聞けず候得ば下向を許し申さず候よ、〇下向致し申さぬ時は連判に違ひ申候依て両方相背き申さぬ様に致し度と存し詰め腹切泉下にて亡君へ御目見得申上げ萬事御物語り申上べく候 淨「讀みも終らず爺親は三平の傍にうなり聲 七「ヤイ三平斯ういふ思立が有るぢは實之斯うじやと此親になせ明してはくれなんだぞ 淨「我も元は大島家に仕へし武士の果ならずや 七「此企の有うとの夢にも知らぬばつうりに大石殿を誹謗なし嫁を迎へし親の心は更々家が惜いでない獨身者で置くならば二君に仕へる氣にもなり御恩を受けし淺野殿 淨「主君の名を穢さうかと思ふそちに其心があらば何の止めやうぞ夫をいはし世間の人に洩しでもとる事かと思ひ過でしが腹が立七郎右衛門は親ではないかいヤイ 淨「去りてはつれない我子ぞと氣も魂ももみあげて恨み歎ぞ道理なり三平苦しき息の下 三「斯く相果なは親人のお歎き且は是成る於民殿賑やつれなくおぼされんと夫といはねど紀念の辞世父上御覽下され 七「ナ、〇何々消て行く露となる身はいとはねど心に懸る跡の行末 和「兄者人に其御所存の有るぢは我にも主君の仇敵 民「此身の爲にも夫トぞと思ひに思ひしあなたの大望夫と知らばけふの祝言無理にせがみもせぬものを 和「かういふお身にならうとは夕べの夢にも知らぬ事 民「元は

といへば此身故ぞうぞゆるして下さり升せ 淨いふも涙に吳竹の直な操ぞいぢらし、始終の様子作藏が聞くにたまらず走り出 作「モ」若旦那あらい事をして下さり升たやたら滅多に延喜を祝ひ目出度くといはしやつた親旦那が馬鹿者じや○サアおこらつしやるか様子を聞けばお主様の忠義とやらの敵討○イヤ〜いふても滅多な事咄と様な作藏は馬鹿者ではないけれど尋てムつたお武家でさへ泣てムる程なれば私の悲しいも御尤じや御尤様でムり升るわい 淨「傳ふ涙の水ばなをす〜り上れば不審の爺親 十」何武家か尋ね参りしとは三「夫ぞ關東下向の道連れ古傍輩の片岡源吾右衛門岡野武林の人々ならんイヤ先づ是へ 淨「苦痛ながらもまやうすれの中庭傳ひに入り来る同志草鞋の儘にいちゆうし」ト上手より源吾右衛門小紋の絆纏股引柄袋の掛りし大小切緒の藁草履一文字笠を持ち金右衛門只七付添ひ出て来り」 源吾右衛門「先刻是なる両所より承りし差圖に任せ裏より参つて聞けば一旦の誓紙を守り切腹有りし三平殿 金右衛門「誠に貴殿の誠忠は四十餘人の人々にも絶へて及ばぬ武士の潔白 只十」御親父を始めとして和助殿の御愁傷 三人「察し入る 淨」と痛み歎けば七郎右衛門 十「スリヤ悴三平が古傍輩片岡岡野武林氏とは御邊等よな御姓名は承知致せと今日始めて御意得申せし此親が誤り故に悴か切腹親がつらさをば今身に覺へし面目おさせめて三平斯くなる上は同じく主君へ仕へし和助殊に肉身の兄弟なれば彼を敵討の人数の内にお

差加へ下さらい兄が志しも立つ道理此儀何卒大石殿へ御吹舉願ふ何れも方 淨「頼みの詞感し入り 源「忠義に厚き三平殿の親御程あつて子の爲に忠義の道を失なはざる御所存の程驚き入た其義ならは大石殿へ申通する迄もなく拙者が預る一味の連判 金「和助殿の心底さへ只「其義ならは 三人「仰せに任して 和「拙者とても兄の胸中探りし程の望みの仇討お供が叶はい兄上にも無御満足にムり升せう 三「とはいへ未だ若年の其方御役も立ざる者にはムれども希はくば拙者と思ふて 源「アイヤ仰せ承知致した只今是にて血判をば 淨「いひつゝ出す連判を見るに手負は打悦ひ 三「すりや連判よおさし加へ下されんとな 七「和助悦べ是にて兄が忠義も立 作「若旦那の御願ひの叶うたのでムり升る 和「有がとムり升る 淨「親子主従顔見合せ悦び合ぞことわりなる源吾右衛門姓名を書記し」ト源吾右衛門矢立を出し連判狀に和助の姓名を記す」 源「イヤ和助殿 三人「血判召れ 和「ハ、ハッ 淨「流石血氣の勇ましく小指くい切り姓名の下にしつゝ誓ひの血判 源「三平殿血判儘に 三人「受取申た 三「忝ひ 源「イヤ此上は片時も早く 金「同道致さん 三人「和助殿 和「旅の用意は途中に於て兵「其御荷物作藏殿 作「私しが御供を致し升う 七「早く荷物を持て来い 作「合点でムり升る 淨「おつと任せと中庭つたひ足返して走り行く」ト作藏這入る」 淨「三平苦痛を押しこらへ三「いかに弟○敵は名にかふ吉良上杉付人も敵多有りときくなれば 淨「油断大敵不覺を取る

なととげます詞も勇み立 和仰にや及ぶべき和助か爲には主君の仇兄の仇 第一番に乗り入つて萱野三平一番鎗と名乗りを上げ兄と我との二人前敵たう奴原一々に突立切立突伏せて鎗玉にわけてくれんな手裏に有り 和氣遣ひ有るな兄者人 七なれども必定用心厳しく門戸の堅めも疎ろか成るまじ夫を破るの御用意有るか 源いかにもく大石殿の工夫に因て得物は投げ槌細梯子 源雨戸は竹弓に音をもさせずハタとはね寐込みに踏入り名乗かけ不意に一泡吹さん計畧 金素より夜討の事なれば山と川との合詞に 味方は三人一組と兼て定めし手筈の通り逃るは助け刃向はい真向ふ微塵車切り手當り次第に討て捨て 只目ざす敵は吉良一人 源天井床下柴部屋に隠なるとも鎗を入れ主君の怨敵上野か首あげん事いと易し 源草葉の蔭より見物せられよ 三人三平殿 源勇み立たる勢は今日前に本望を遂けし心地ぞせられける作藏思はず小躍りなし 上上手より作藏旅拵らへにて割掛けの荷半合羽笠を持ち出て来り 作出来た 七悔り致すわい 作イヤ何旅の仕度が出来升た 和助に渡す和助合羽を着る事有つて 源然らは何れも 三人最早出立仕らん 三我は冥途に赴くとも魂魄は弟が影身に添ふて本懐の其夜にまみへ申でムらう 源スリヤ左程迄 三人三平殿には 三身は死するとも主君の恨み晴さいで置べきか 兵其か詞を聞につけて 作 職お弟御の旅立がお羨ましくムり升せう 七夫は誰故元はと云へば 兵此民故の御

最期 源アイヤお別れ申 源述る禮儀も愁ひをば残して立つか弓取りの出行跡を三平は羨ましげに見送れは見返る親子兄弟の別れ惜氣に鴛鴦の縁しも夏の短夜に近づく鐘も無常の音 内源吾右衛門先に金右衛門只七和助作藏付添ひ門口へ出る三平は苦痛ながら羨ましくなしていきりながら下手へ行く是を木なしに此道具逆に廻る

造物二重の横手惣庇三尺の通り椽向ふ腰羽目の鼠壁能き所に庇受の柱下手植込つくばいの手水鉢以前の枝折門上手に廻り都て通ひ廊下の体半廻りに納る 廻りに付き三平跡を見送りながら七郎右衛門於民介抱のして出て来り淨るりの留り本釣鐘にて花道の皆々能き所にとまり 皆々ありやモウ暮六ツ 三最早此身の近づく知死期 兵せめて伯父さん息有る内に 和ハッ ト下居る三平向ふを見詰めよいかといふこなし和助胸を叩く三平安堵のこなし有つて 三ヲ ト思はず立上る 源哀れ果敢なく ト三平立身にて引廻し笛をかき切りひよろくとして柱に行當りばつたり下に落入る此内七郎右衛門花道の皆々は合掌をし臨終を勧めるこなし於民は三平に取り付き泣落す此模様愁三重にて幕 幕引付ると在郷歌に成り花道の皆々涙を拂ひ向ふへ這入る

演劇 赤城義臣傳 大尾

明治廿七年十二月廿四日印刷
明治廿七年十二月三十日發行

(定價金十貳錢)

版權及發行
所有權

不許謄寫

大阪東區備後町四丁目四十番屋敷
勝 諺藏事

著作

勝 彦兵衛

版權所有者
兼發行者

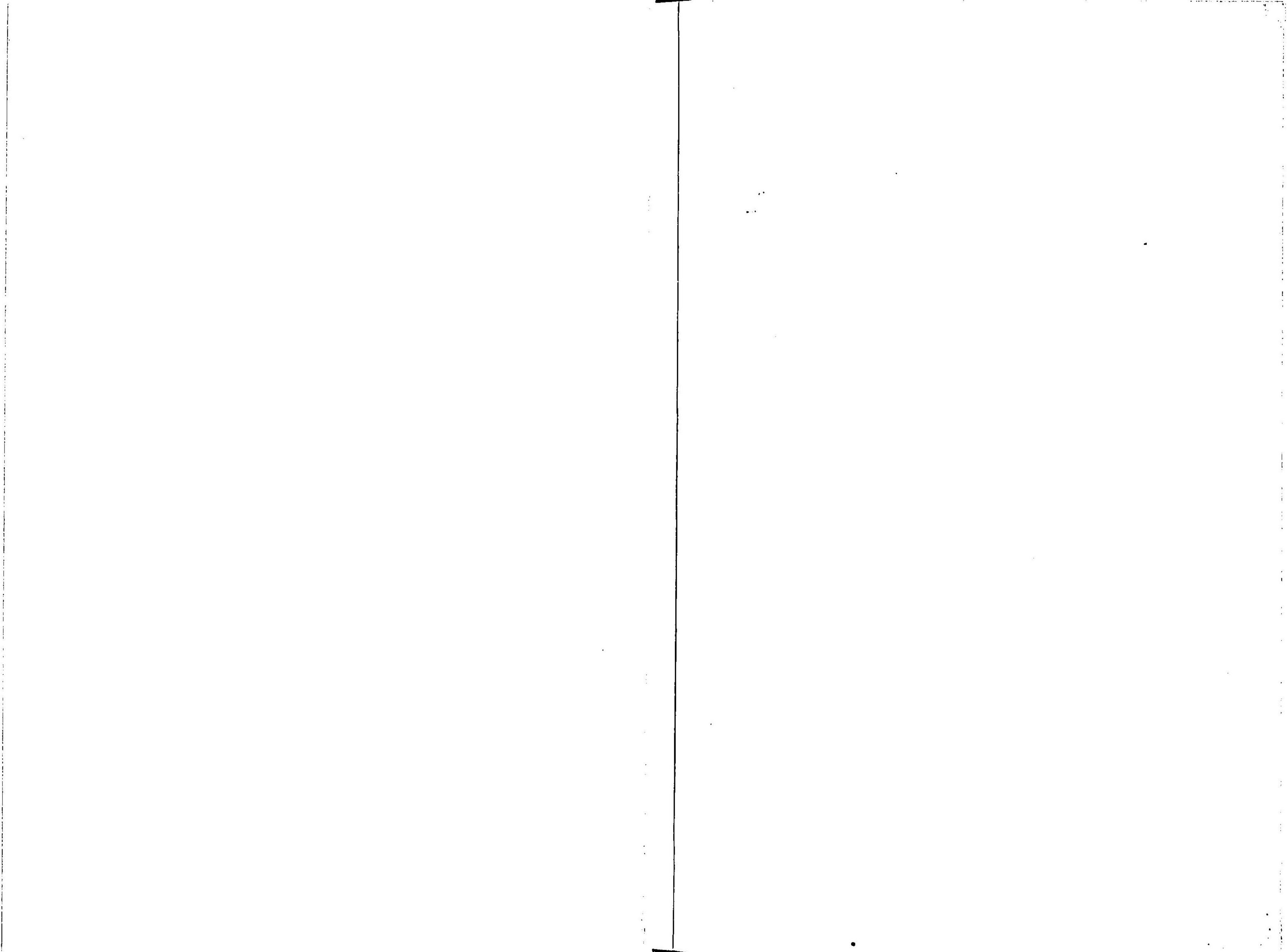
大阪東區備後町四丁目四十番屋敷

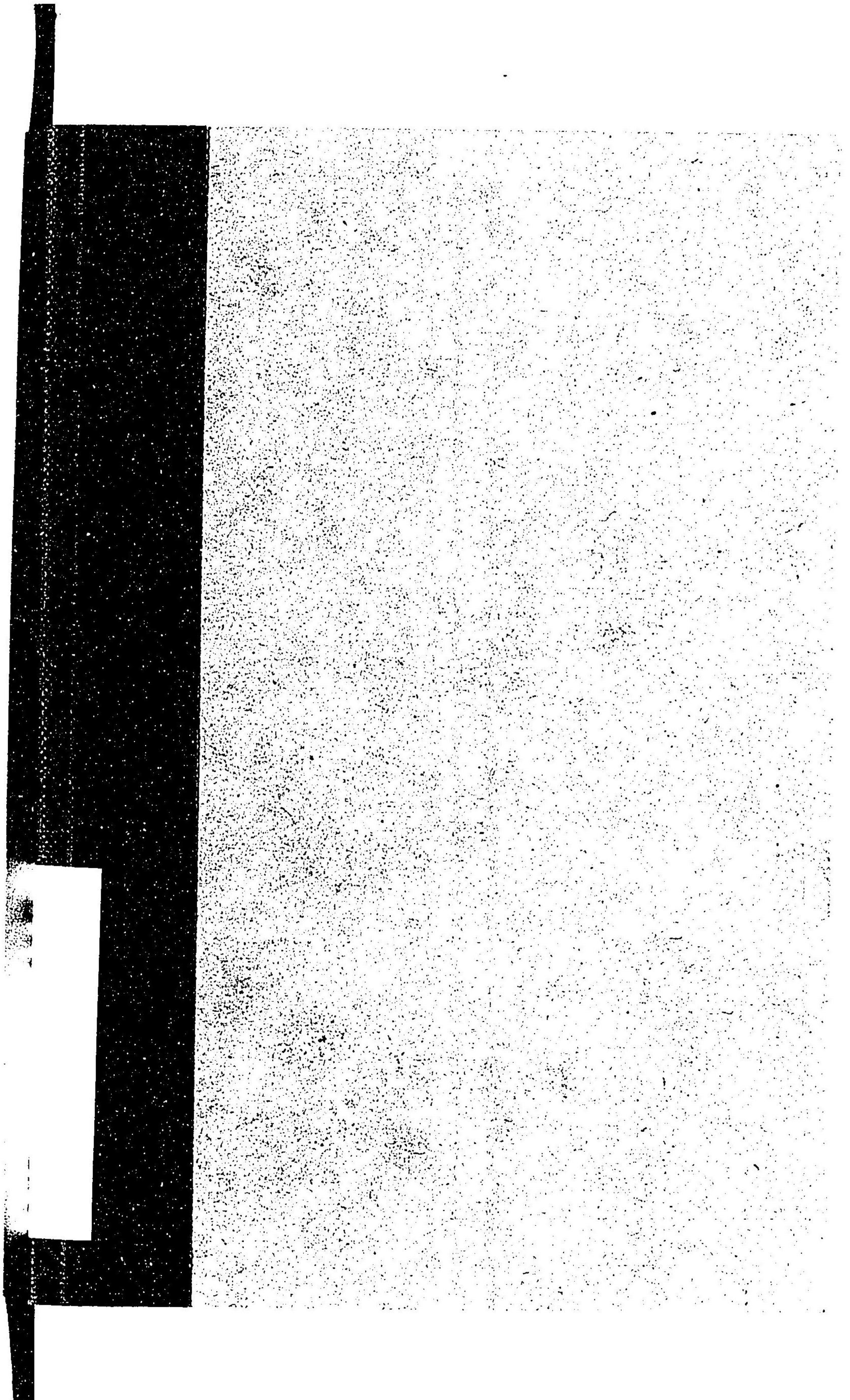
中西 貞行

大阪東區內本町橋詰町六十八番屋敷
周擴社

印刷者

前田 菊松





特51

662

赤城義臣伝

国立国会図書館

088377-000-0

特51-662

赤城義臣伝

勝 諺蔵 / 著

M27

DBJ-0003

